



Photo 古谷千佳子

海女サミット 2011 日本列島「海女さん」大集合

AMA SUMMIT 2011 in TOBA

第3回鳥羽大会報告書

日時 平成23年10月29日(土)～31日(月)

開催場所 三重県鳥羽市・志摩市

29日 三重大・海の博物館・鳥羽市文化フォーラム:海の博物館・・・P1～P19
海女サミット 2011 前夜祭 海女交流会:相差女性活動センター・・・P19

30日 相差町視察:相差町海女関連施設・・・P19
記念放流:相差漁港(皇子御さん)・・・P20～P21
海女サミット 2011 日本列島海女さん大集合:長岡中学校体育館・・・P21～P36

31日 エクスカーション:志摩市一円・・・P36～P37

海女サミット実行委員会

AMA SUMMIT 2011 海女サミット2011 日本列島海女さん大集合

三重県の東端部に位置し、全域が伊勢志摩国立公園に指定されている鳥羽市・志摩市では、女性が素潜りにより自然と共生しながら漁をする海女を、貴重な地域資源と位置づけ、海女文化の継承啓発事業に取り組んでいます。

平成21年に全国ではじめての「日本列島海女さん大集合」を鳥羽市で開催し、翌22年には、志摩市で第2回大会を開催、その集大成として、平成23年10月29日から31日にかけて、日本で一番海女が多い鳥羽市相差町を中心に、たくさんの皆さんの協力を得て、海女サミット2011を開催しました。ここに当日の様子をお伝えします。

三重大・海の博物館・鳥羽市 文化フォーラム

「海女文化を活かす」

10月29日、海の博物館において、「海女文化を活かす」を共通テーマに、三重大・海の博物館・鳥羽市 文化フォーラムを実施しました。

このフォーラムは、第1回を平成21年に、共通テーマ「志摩の海女文化を探る」として開催し、第2回を平成22年に「産業としての海女」を共通テーマに実施し、今回が3回目となります。会場となった海の博物館映像ホールには定員を超える133名の聴講者をご参加いただき、フォーラム後のアンケート結果では、9割以上の方から高評価をいただくなど、3年間を締めくくる有意義なフォーラムとなりました。

（文化フォーラム要旨）

都びとの憧れ－歴史に見る「観光海女」

三重大学人文学部教授 塚本明

今日の共通テーマは「海女文化を活かす」ということである。このテーマに関わって、私からは観光海女という存在について歴史的に考えてみたい。

はじめに海女文化の多様性について確認しておく。海女とは、潜水して魚貝や海藻を獲る漁業者であり、これが海女さんの本源的な姿である。

しかし、年間を通して海女漁だけで暮らしている人は、過去も現在もあまりいない。海女漁を行う期間は限られているので、他は農作業、水産加工、小商売や出稼ぎで働いたりしている。江戸時代には、船が難破して沈んだ時の救助や、沈んでしまった荷物を引き上げるために海女が雇われたこともある。海女さんを専門的な職業としてとらえるのではなく、志摩漁村の女性の一生業形態が「海女」とであるとして、幅広く考える必要があると思う。その様々な働く形態の一つに、観光海女がある。

観光海女とは一種の見世物であるが、見世物と言うと、あまり良いイメージはない。私も少し前までは、観光海女など邪道ではないかと考えていた。しかし、大相撲もプロ野球も、歌手も見世物である。何が魅力で見世物になっているかを検討したい。



海女さんというのはしばしば半裸体で漁をしたことから、海女を描いた浮世絵などを念頭に、エロチックな魅力で人気を集めたのだと指摘する人が少なくない。もちろんそういう部分もあるが、それだけではなかったということを申し上げたい。

この問題を取り上げることで、海女さんたちの尊厳を傷つけないかということを心配するが、観光海女を行うか否かは海女さん自身や志摩の皆さんが考えることであり、私からは、あくまで歴史上の事実を明らかにして、海女文化を将来に活かすことを考える際に参考にして頂きたいと願っている。

万葉集に歌われた海女

万葉集に海女さんが歌われているのはよく知られている。モチーフはいくつかある。まず、鮑は巻貝であるが二枚貝の片方しかないものと見立て、「片思い」とかける歌がある。次に、海女さんは海に潜って鮑やサザエ、また真珠貝などを採るが、鮑や真珠貝のなかに稀に珠が入っていたら、献上品などに用いられる。これらのことを念頭に、万葉集では海女さんが玉と結びつけて歌われてもいる。

大事なポイントの一つとして、万葉集においてしばしば伊勢と志摩は混同されている。「伊勢の海」とされていても、明らかに志摩の海のことがある。都に住んでいる人たちは実際の海女さんを見てはおらず、想像上の海女さんを歌っている。内陸に住む人たちにとっては海自体が憧れで、その荒磯で素潜りをする女性として海女さんをとらえていた。

浮世絵に描かれた「伊勢」の海女

少し時代が下るが、江戸時代の浮世絵の中に海女さんが盛んに登場してくる。有名な二見浦を背景にした海女さんの絵があるが、実際には二見浦では鮑は採れないし、海女さんもおらず、虚構を描いたものである。もうひとつ、海女の浮世絵には蛸が出てくる点にも注目しておきたい。

歌川国芳が描いた海女の絵で、玉取り姫伝説に基づいたものがある。藤原不比等が竜神に奪われた玉を取り返そうとして、玉藻という海女さんに海底に潜って貰い、竜宮から玉を取り返すという話だが、玉藻が竜から逃れるために乳房の下を切り裂いて玉を隠し、竜と戦いながら逃げたという話で、ここにも蛸も描かれている。

葛飾北斎も蛸と海女をモチーフにした春画を描いた。これは明らかにエロチックな絵画であるが、一般には幕府の政策で風俗規制が取られたため、世間の需要に応えつつ、規制を逃れるために、職業人として海女さんを描いたものと考えられている。

江戸時代の浮世絵の特徴として3点指摘したい。まず、二見浦の夫婦岩を背景にした絵に見るように、伊勢と志摩が混同されていること。玉取姫伝説のように、玉を持った海女が登場すること。蛸と海女の強い結びつきが見られること、である。

蛸というのは非常に変わった形をしており、絵画のなかではしばしば妖怪や化け物として描かれる。なぜこの時に海女さんと蛸を描いた絵が人気だったのか。もちろん海女さんと蛸が交わる場面を描くものがあるように春画としての側面もあるが、それだけではなかった。

人類学などで使われる概念用語に「両義性」という言葉がある。我々は陸上で生活を送るが、海女さんは陸上も海中も知っており、双方を往き来する「両義的」な能力を持っている。二つの世界をつなぐものとして、そしてエキゾチックな異界のイメージを持つ存在として、海女と蛸が描かれたのではなかろうか。

見物される海女(江戸時代)

現在、ミキモト真珠島で海女の実演ショーをやっている。一時的にではなく、年間を通して活動している観光海女の代表的なものである。

雇われて海女を実演する観光海女は、江戸時代から存在した。1797年に刊行された『伊勢参宮名所図会』中に、津の少し南にある小加良須御前社附近の記述で、「此磯より漁舟をかり乗れば津の入海に着也、其船時釣をたれて魚を得さしめ、又あまのかづきなどさせて興とす」とある。つまり香良洲から津へ船で移動する途中、船で釣りをし、そして海女を潜らせて見物して楽しむ、とされているのである。

しかしながら香良洲沖も津の海岸も遠浅の砂浜なので、二見浦と同様に鮑もサザエも採れず、海女さんもないはずである。場所は恐らく間違いで志摩と混同したのだろうが、海女さんを雇って潜らせて楽しむという一種のショー、まさに観光海女が存在したこと、少なくともそうした認識が『伊勢参宮名所図会』を著した都会人に存在したことを、確認できるのである。

二見の荘という村の古文書に、明和 9 (1772) 年に京都から長橋局という天皇側近の女官が、お伊勢参りに来た後に二見浦で遊んだ記録がある。そこには、浜へ出て「あまをよび鮑をとらせ」と書いてある。二見浦では鮑は採れず、海女漁をしていた記録もない。おそらくは、鳥羽志摩から海女を呼び、鮑も一緒に持ってきて、海女を演じたのではなかろうか。常時行われた訳ではなく、高貴な人が来た時の特別のサービスだったのではないかと思う。

見物される海女(明治期)

明治に入り、海女ショーは各地で見られるようになる。大阪の千日前は、見世物小屋が立ち並ぶ繁華街であったが、そこでの見世物のひとつに「海女の鯉掴みショー」があった。鮑やサザエではなく、池の鯉という海女漁とは全く無縁なものが獲物となっている。しかしこれが大変人気を得たようで、明治 14(1881)年以降、千日前で恒例の興行となり、そして大阪だけでなく浅草や京都の新京極でも同じことが行われた。明治 43 年の伊勢新聞の記事によれば、こういう見世物をやっているのは皆、志摩の海女である、としている。

具体的にどんなショーをやっていたのか。明治 17 年の東京で行われた事例では、舞台に一間半 (3 坪弱) の池を作り、お囃子に乗って女性 2 人が花笠をかぶって登場し、変な声を出して伊勢音頭を歌う。そして裸になって水に飛び込む。また明治 34 年 2 月の京都での事例では、「寒い中での女性の水泳、その残酷なる様と裸体婦人の見放題」という惹句で客を集めている。盆を頭に載せ、2 人が他の 2 人を肩車して傘を翳し、そしてお客さんにお金を投げて貰っていた。海女さんの実際の生業とは全く無関係の演芸であり、曲芸である。海女さんの実演ショーは、このような卑俗な形で都市社会に拡がってしまった。

御木本幸吉の真珠養殖と海女

都会での卑俗化したものとは違う形態が、御木本の真珠養殖場での海女実演である。御木本幸吉は明治 26 年に半円真珠の養殖に成功し、以後志摩の各地に真珠養殖場を開設するが、海中から母貝となるアコヤガイを採取し、核入れの後に海底にばら撒き育てるための作業を行う者として、志摩の漁村から海女さんを雇った。大正年間には筏と養殖籠が採用され、海女の潜水作業の必要性は低下したが、引き続き養殖場で海女さんは雇用され続けた。

真珠養殖場における海女さんの仕事のひとつに、海女の実演ショーがある。明治 32 年、当時の農林大臣が御木本真珠養殖場で海女作業を見学したのを皮切りに、明治 44 年には明治天皇皇后が参宮後に二見浦へ来た際、そこで海女の真珠採りの実演を見せている。御木本幸吉があらかじめ選りすぐったアコヤガイを海に沈めておき、熟練の海女 40 名余りを選抜して海中に潜り貝を採らせ、真珠貝を取り出して見せて献上したところ、皇后は大満足であった。これが大成功を収めたためか、その直後の鳥羽線開通式の余興でも海女作業を見せ、さらにその後に鳥羽港に海女作業場を新設し、常時海女作業を見せるようにした。これが、現在のミキモト真珠島につながっていったのではないか。

博覧会のなかの海女館

御木本の真珠養殖場の海女さんとは直接のつながりはないが、大正末頃から始まる博覧会ブームのなかで、海女館という施設が登場する。海女館の特徴として、①竜宮城を模した建物である、②大きな水槽のなかで鳥羽志摩から雇われた海女が潜水し、貝を採ってくる実演をした、③館内で真珠の即売が行われる、という 3 点が挙げられる。こうした海女館は日本全国に広がり、水槽のなかでの海女実演は海外でも行われるようになった。

具体的な事例を見よう。昭和 6(1931)年に開催された北海道の小樽海港博覧会で海女館が建てられ、

志摩の海女さんが実演している。博覧会の報告書によれば、北海道庁から三重県庁に連絡が行き、そこから和具漁業組合に依頼があり、そこで人選された志摩海女が、博覧会側の費用によって北海道に派遣されたという。

昭和 14 年には、アメリカのサンフランシスコ万博で海女実演計画があり、志摩海女 5 名が渡米予定であった。しかし、日本女性の裸体を外国人に見せるのは国辱であるとの議論がおこり、中止命令が出された。結果的には、真珠加工技術員の名目で渡米した女性 2 人が海女を実演してしまい、帰国後に旅券規則法違反として首謀者である神戸の真珠商人らが処分されている。海女実演の背後に真珠商人たちが居たことが分かる。

海岸での海女

見世物としての「観光海女」は、見世物小屋や博覧会の海女館だけに居たのではない。次に、海岸での「観光海女」について検討したい。東尋坊をバックに躍っている海女さんの絵葉書があるが、祭礼時に自分たちで楽しむ踊りなのではなく、観光客に見せるための海女の踊りである。東尋坊では戦後まで、客が銭貨を海中に投げ入れてそれを海女が拾ってくるという見世物があった。旅中にそれを聞いた文化人の中村稔が、それを哀れに感じて「海女」という詩を作っている。

こうした海岸での「観光海女」は、福井以外でも各地で確認できる。昭和 25 年には、兵庫県の日本海側、城崎の日和山に遊覧施設である「竜宮城」が作られた。元々この地に海女文化はなかったが、竜宮城を作ったことに伴い、海女さんの実演が導入されることになる。彼女らが取ってくるものは鮑でもサザエでもなく、お客さんが杯を投げてそれを拾ってくる、というものであった。これは昭和 60 年までやっていたらしい。日和山の海女音頭という唄があり、歌詞に「志摩娘」と出てくることから、この海女も志摩からの出稼ぎであったことが分かる。観光客に海女音頭を唄い、踊って見せる訳で、海女さんの実際の活動とは無縁のショーが行われていたことになる。

「海女と真珠の志摩」

三重県での事例を見よう。昭和 5 年頃、二見旅館街のふもとに二見浦水族館が建てられ、その目玉として海女さんの実演が、「玉取姫ナラヌ真珠貝取りノ美シイ海女」というキャッチフレーズで行われていた。昭和 6 年には臨海博覧会が開かれ、海女の実演と、県下の海女潜水競技大会が行われた。二見浦の前で海女が潜る絵葉書が残されており、昭和 4 年 4 月 1 日の日付印がある。普段の様子ではなく、何かのイベントの時のものだろう。あるいは、二見浦水族館に関わるものかもしれない。

この頃の観光絵葉書には、盛んに海女さんが出てくる。パンフレットなどにも活用され、「海女と真珠の志摩」という言葉が盛んに使われている。

鉄道省が昭和 2 年に作成した案内図に鳥羽の観光案内が記されるが、そこには「鳥羽は鮑どこである。・・答志島へ渡ると海女は喜んで其の舟にのせて作業を見せてくれる」などとある。また、菅島や答志島などで海女を見ることができ、かつ「これを雇ひて獲物をとらすことも出来る」とする点が注目される。海女を雇い、獲物を採って貰うという、文字通りの海女漁業の実演が行われていたのである。昭和 4 年のパンフレットでは、海女の実際の作業を見るのは難しいが、遊覧船事務所に頼めば海女さんを雇うことができ、2 人一組 1 回 4 円位で潜って獲物を採ってくれる旨が記される。これらは、実際の海女漁業の作業を見せるという点で、観光海女のなかでは最も健全な形で展開したものと言えるのではない。

伊勢志摩国立公園のシンボル

戦後すぐに、御木本らの運動もあり、伊勢と志摩がセットになった伊勢志摩国立公園が指定される。そのなかで、観光土産として「伊勢の海女」という人形なども登場している。伊勢と志摩が、海女を通じて結びついているのである。大正から昭和前期にかけて、「海女ブーム」と言って良い現象が起きており、それが伊勢志摩の観光の中心となった。なお、そのなかで「観光海女」に投げ銭をするような弊害も発生し、また漁業とは無関係の、踊りを見世物とする海女も登場する。当時「猟奇の国、志摩」と

いうキャンペーンも張られた。ただし、ここでの「猟奇」とは南国、異国情緒という意味合いでの使い方である。

海を眺望する施設の展開

さて、この時期の海女ブームの背景として、この頃に人びとと海との関わりが変わったのではないかとと思われる。まず、海を眺めるための施設が、この時期に相次いで建設される。

伊勢神宮の東南方面にある朝熊岳金剛証寺は、江戸時代以来、参宮客が合わせて参拝する地として賑わったが、その後衰退していた。大正 14(1925)年に開設された朝熊岳のケーブルカーは、生駒山に続き日本では二番目となるもので、東洋一の規模と称される。当初地元の有力者たちによる計画の失敗後、伊賀の田中善助という実業家の尽力によって成し遂げられた。

続いて昭和 7(1932)年には二見浦の音無山ロープウェーが、その翌年には鳥羽の日和山エレベーターが建築される。これらの施設に共通するのは、高い地点からの海の眺望を売り物にしている点である。そしてとりわけ鳥羽の日和山エレベーターについては、「日和山小唄」の歌詞や、記念絵葉書のスタンプにも表れるように、海女との結び付きが濃厚に見られる。日和山の眺望と海女の作業の見物が、鳥羽を訪れる観光客の一番の目的とされたのである。

海水浴の拡がりと海女

海水浴が人びとの馴染みの娯楽となるのは、近代以降のことである。しかもそれは当初は西洋医学の観点から、潮浴みが健康に良いとして広まったものであった。明治 15(1882)年に、日本軍医の松本良順により、二見浦が日本最初の公認海水浴場に指定され、その後明治末年頃にかけて、阿漕浦や鼓が浦など伊勢湾沿岸の各地に海水浴場が発展していった。津海岸は、明治末年から大正期にかけて海水浴の適地として知られるようになり、「夏は津の海へ」というキャンペーンも展開される。鼓が浦は文化人の集う地となり、現在も文人たちの歌碑が多く残されている。海水浴場は競馬場や遊技施設などが併設された一大遊技施設であり、多数の来客で賑わった。

このような海水浴ブームにより、人びとにとって、歴史上初めて海で泳ぐということが身近な行為となった。「海の時代」が到来したのである。

そして海水浴場にも海女が登場する。伊勢湾の対岸の知多半島の半ば、現在は中部国際空港のある少し北側、常滑の大野という地に、古来「潮湯治」の場として有名な海水浴場があった。ここに戦後すぐから昭和 34(1959)年頃まで、毎年夏の海水浴シーズンに鳥羽から海女さんが船に乗り、船頭、機関士、ガイドとともに来て、海女の実演をしていた。とは言っても遠浅の海で海女漁の地ではない。あらかじめ鮑やサザエを海底に沈めておき、客を乗せた船で沖に出て、海女さんが潜って貝を採ってくる、というショーである。見学科は 100 円から 300 円くらいだったようだ。当時、海水浴場でアルバイトをしていた方に話を聞いたところ、海女さんは半裸体であったが、決してエロチックな雰囲気などではなく、観客も子供連れなど家族連れが中心だったと言う。

こうして賑わった海水浴場だが、1950 年～60 年頃、相次ぐ台風の襲来や津海岸での女子中学生集団遭難事件、プールの普及、鉄道網の変更、レジャーの多様化などにより、衰退していった。

海女の魅力とは何か

では、改めて当時の人たちが海女さんのどのような点に魅力を感じたのかを、再度考えてみたい。博覧会における海女館は、非常に人気を博した。博覧会の報告書類では、海女館が「最高のレコード」「いつでも好成績」「非常な人気」であったことを伝えている。その要因について、博覧会研究の第一人者である寺下勲氏や橋爪紳也氏は、海女たちのエロチックな様子が人気を呼んだと強調している。若い研究者からも、同様の見解が示されている。

しかしながら、観光海女をエロチックな魅力だけで論じるならば、江戸時代に朝廷の女官や近代以後に皇太后が二見浦で海女見物をしたことの説明が付かない。また、博覧会開催を記念して作成された絵葉書で紹介される、海女館前で行列を作る人びとの様子を見ると、明らかに女性や母子連れの姿が目立

つ。博覧会の絵葉書には海女館を題材にしたものが少なくないが、そのなかでも、海女を「体育」「水中スポーツ」として宣伝し、また水中を格好良く、自由自在に泳ぐ能力、現代におけるシンクロナイズドスイミングの如き魅力を持つ者として伝えているように思われる。

「アスリート」としての海女

つまり、海女は一種のアスリートでもあった。昭和 11(1936)年 11 月 19 日付けの伊勢新聞によれば、1960 年(1940 年の間違い)に予定されている東京オリンピックに潜水競技を新種目として行い、海女を参加させるという構想があった。実はその提案者は、三重県議会議長の石原円吉である。東京の事務局本部は、趣旨には賛同するが他国の参加は困難であろうとして、志摩海女だけで競技を行い、世界に紹介することを提案した。

なお、石原円吉は先に触れた昭和 14 年のサンフランシスコ博覧会への海女派遣問題について、「国宝的存在である神聖なる海女作業を、心無き事業家の宣伝用具にしようされることのないよう自戒を促す」と訴えている。オリンピックに海女を出場させようという提案は、決して興味本位の見世物としてではなく、その技能への敬意に基づいたものであったろう。

終わりにー海女の魅力ー

歴史上、人びとの人気を集めた海女は、もちろん女性ゆえの魅力があったことを否定しない。怪しげで、海女漁の実態に反した「見世物」も、三都を中心に存在した。だが、その魅力をエロチックな要素だけで論じることはいできない。

歴史的には、女性が海中に身体ひとつで潜る異能の者、海と陸の両界をつなぐ両義的な存在として、畏敬の念で見られることもあった。近代以降、「海の時代」になると、海の眺望施設の発達、海水浴場の賑わいにより、前代に比べ人びとの海との関わりが格段に深まる。そのなかで、海中を自由自在に泳ぐ海女の技術が注目を集めるようになった面があるのではないか。御木本幸吉が真珠養殖場での海女実演を行ったことも相俟って、「真珠と海女」が結び付き、また伊勢と志摩も一体となり、海女がその象徴の一つとして宣伝されるようになった。

釣り人や網を引き揚げている漁師の姿に接すると、つい立ち止まり見入ってしまう人は少なくないだろう。芋掘りや果物苅りなど、農業でも実地で収穫する体験は人気である。その根底には、根元的には食べ物を自然から採取すること、その姿を見ることの魅力が潜んでいるのではないか。海女さんが人びとの眼を惹き付けるのも、簡素な道具を持つだけで、通常の間人にはできない潜水技術により、自然界から食糧(魚介)を採取してくるという、最も原初的な第一次産業のあり方を示しているからだと考える。海洋国日本として、また海の汚染や資源の枯渇が叫ばれるなか、海と人間との関係の再考を迫られる時代であるが、海女はその象徴として議論されるべき存在なのである。

海女文化をどう捉えるか

三重大学大学院工学研究科教授 菅原洋一

海女研究会の発端

2008 年、石原館長による「志摩の海女と済州島の海女を世界遺産に！」という講演での問題提起から始まった。

海女は、三重県にとって豊かな風土を象徴するような大事な存在である。しかし私たちはあまりにも海女のことを知らない。海女に関する実態把握、研究も十分とはいえない。世界遺産を目指す以前にその是非を考える基礎的な材料が必要であることから活動を開始した。

2009年海女研究会の活動開始

海女を様々な角度から捉える必要性があることから、歴史、文化、水産資源、海の環境、漁村の暮らし、女性、広域的な活動の広がり、高齢化、観光など色々な面から海女を検討することとした。世界遺産を目指す会ではない。

2009年10月から県立博物館において隔月で例会を開催している。参加者は海の博物館、三重県（博物館、教委、水産研）三重大学（生物資源、人文、工）はじめ県内外の方々であり、自由に意見交換している。

一つの対象について色々な分野の方が入って研究する会というのは中々なく画期的な会だといえる。海女に限らずこの地域の持つ歴史や自然等を発掘し、評価して次の世代に引き渡していく作業が必要だと思う。海女研究会に限らず地域を考える色々な研究会活動が広がっていけばいいと思う。

海女研究会での報告

報告内容は大きく分類すると、次の9項目となり、海女が多様な検討を必要とすることが理解できる。

- ①海女研究のあり方・・・海女研究の可能性、調査研究資料の蓄積、海女シンポジウム報告など
- ②世界遺産・・・屋久島の世界遺産登録の前史とその影響など
- ③韓国の動向・・・韓国の海女研究と海女世界遺産推進状況、海女調査報告書、海女文化関連条例など
- ④日本各地の海女と漁業・・・南房総・鐘崎・岩屋など各地の訪問調査
- ⑤海女の出稼ぎ・・・近代志摩海女の出稼ぎ、北海道の利尻訪問調査など
- ⑥三重の海女・・・志摩海女、熊野の済州海女、明治大正期の海女など
- ⑦全国的な海女の実態把握・・・全国海女存在調査など
- ⑧資源管理・漁業・・・三重県における海女漁業の現状など
- ⑨潜水科学・ジェンダー・・・海女の衰退を潜水科学、ジェンダーの視点より実証的に研究など

課題として見えてきたこと

産業としての海女

- ・海女の資源管理、高齢化、存続のために必要なこと、漁業の中での海女の位置づけ

海女を産業とだけ見てよいのか

- ・海女漁単独背生活は成り立つのか。
- ・海女漁に従事する期間はかなり短いのでは。
- ・海女は他にたくさんのことをしている・・・畑、家事、海仕事、観光業など。
- ・海辺の村での女性の様々な営みのひとつとして海女がある。

漁村の暮らしと海女

- ・村の暮らしその全体の中に海女がいる・・・潜ることだけでなく漁村の生活の中で考える必要がある。
- 基盤となる多様な海の資源がある。「海女文化を活かす」ことは、海女以外の漁村の様々な資産を活かすことでもある。

海女はいったい何か

- ・時代、場所で海女のあり方が違う・・・漁法、衣装、道具、海女小屋、信仰、祭、素もぐり、女、男

海女の何に本質的価値があるのか

- ・海女の実態把握に基づく議論が必要・・・平成22、23年度海女習俗調査（県教委）
- ・当事者である海女さん、地域の方々はどう考えているのか。

海女の本質的な価値は何だろう

- ・歴史的・文化的な側面・・・長い歴史、多様な磯資源を利用する技術、資源を維持するためのルール、信仰や民俗、文芸・絵画の題材、神宮、御師、真珠養殖との結びつき

※海女の価値を共通の認識にする必要がある

文化財的な位置づけ

- ・しろごまつり、御潜神事は文化財として位置付けられていない。
- ・三重県で海女関連で位置づけられているのは国崎の熨斗鰻づくりだけ（県指定無形民俗文化財）

三重における価値

- ・三重県の歴史、風土の豊かさの象徴的存在
- ・伊勢神宮、鮑、真珠

日本における価値

- ・岩礁性海岸の多様な漁撈技術
- ・日本最大の海女の活動地域
- ・国際的な海女活動地域の交流

※志摩の海女は次世代に継承したい財産である。

三重を中心とする海女研究の可能性

学際性・・・様々な学問分野からの解明が必要

地域性・・・三重の歴史文化自然産業の結びつき

広域性・・・国内各地の海女活動地と三重との関係

国際性・・・国外の海女活動地と日本との関係

普遍性・・・天然資源を持続的に使っていく。伝統知識や地元の慣例の統合

※三重は海女によって広い世界につながっており、海女研究の拠点となるべき地域

海女についての情報発信

- ・海の博物館（鳥羽市）、志摩海女文化資料館（志摩市）、相模海女文化資料館（鳥羽市）、真珠博物館（鳥羽市）、鐘崎民俗資料館（福岡県宗像市）、小袖海女センター（岩手県久慈市：閉鎖中）、海女文化村（山川芳洋氏：インターネット）

韓国済州道海女博物館の取り組み

- ・済州海女の生業と文化（2009.1 発行）
村ごとの悉皆的習俗調査報告書
- ・済州海女史料集（2009.11 発行）
歴史的な記録価値がある海女関連資料を収録
- ・日本の海女資料の保存展示（鳥羽から寄贈）・・・海女を通じての日韓交流

海女の継承のために必要なこと

- ・海の資源の持続的利用・・・採るものがなければどうしようもない。
- ・海女の継承のための方策
- ・海女のあり方、価値、特色を明らかにする。

※これらの取組を通して海女を活かした地域づくりをしていく。それには当事者である海女、地域の意志が重要であり、前提となる。

海女文化の継承発展の国際的な認知・支援システム

- ・世界無形文化遺産・・・韓国済州道が先行、石原先生が紹介されるだろうから省略。
- ・世界農業遺産（GIAHS）というものもある。世界無形文化遺産以外の方法がないわけではないので紹介する。

(国際連合食糧農業機関が 2002 年に開始)

次世代へ継承すべき重要な農法や生物多様性等を有する地域を認定

地域に適合した管理手法を用い、また多様な自然資源に基づき、採っても回復力に富む生態系などいろいろなものを併せて登録する。

国内では二つある。

①「トキと暮らす郷づくり」(新潟県佐渡地域) 2011

トキを中心とした森と水田、ため池や河川がつながる豊かな生態系や景観を保全する「生き物を育む農法」の振興による郷づくり

②「能登の里山・里海」(石川県能登地域) 2011

里山・里海を中心に農林水産業と一体となって育まれてきた伝統で気な農村文化の下で「持続的な農業生産システム」の振興や里山・里海の保全活動

純粋に漁業で評価されているのがインドのカタマランフィッシングである。マングローブや湿地、藻場などの沿岸環境で漁をしている。

今、海女の世界無形文化遺産を目指すという提起もなされている。しかし、それほど簡単に進んでいく話では決してない。まずは地域の中で海女の評価を定めていくことから、着実に進めていかないと成果を得る事はできない。

海女の世界遺産登録を目指して 素晴らしきかな海女 三重大学客員教授 石原義剛

素潜りで漁をする海女は、広い世界の海に、多くの海洋民族有りといえども、日本列島と韓国済州島そして韓国本土に僅かしかない。

2010 年現在、日本に 2200 人弱、韓国に 5000 人(左恵景)であり、日本では 30 年前に比べ 6 分の 1 ほどに減っている。ちなみに男の海士は推定で、日本には海女数を少し越える程度、韓国では若干いるとみられる。もっとも潜水する民は広く世界の海洋に見られる。

数千年に及ぶ海女の歴史をごく短く記してみる。



自然発生して、食糧としての魚介藻類を海に求めた時代

日本列島では、縄文時代の貝塚から、海底に棲息する大きなアワビ殻とそれを獲るための鹿角製、鯨骨製などのアワビオコシといわれるノミ状の道具が出土することから、すでに潜水し漁する人がいたことは間違いないと考えられている。その漁する人々の中に女である「海女」がいたに相違なく、私は海女を「潜りつづけて 1 万年」と言っている。ちなみに海の博物館近くの鳥羽市浦村町にある白浜遺跡からは大量のアワビ殻と、アワビオコシが出土している。

中国の史書「魏志倭人伝」(3 C)に「倭の水人は好んで沈没し魚蛤を捕る」と水人すなわち「あま」が、男女の別はわからないが、文献上にはじめて潜水して漁をする人として登場する。

魚介藻類とくに、アワビが不老長生の妙薬として珍重された時代

時代は 400 年ほど下がるが、平城宮跡から出土した木簡に「耽羅鮑」の文字があり、日本と耽羅国(現

在の韓国済州島）との間になんらかの交流関係が推察され、その主役が「海女」だったと考えるのは考え過ぎだろうか。古い時代、海の民は想像以上に自由に海を往き来する人々だったのではないか。

日本の文献で「万葉集」（7~9世紀）に「あまおとめ」が歌われ、素潜りする海女のいたことが認められる。今日で言う、女性の海女がはじめて公文書に明記されたのは「延喜式」（905~927）で、志摩の「潜女」30人に衣服料として稲束が支給される、とある。その後、「枕草子」（10世紀末・清少納言）では、明らかに女性の「あま」が、潜水作業に従事していて、男がする仕事なのに、女にやらせるとは酷いと、清少納言は怒っている。

以降、長らく、アワビが不老長命の妙薬と考えられ、伊勢神宮ではアワビはもっとも重要な神饌の一品として現在も欠かすことはなく、国崎（鳥羽市）の海女が献上しつづけている。さらに朝廷、上流階級の間で珍重されたため、「海女」によって獲りつづけられたことは確かであるが、しかし、今日のように海産商品として流通することはなく、生産を増やそうという意識はまだ生まれない時代がつづいた。なほ「海女」の採る海藻類も古代において生命の再生にかかわる食品として大切にされていた。

アワビはじめ藻類が経済価値をもちだした時代

海女が経済上の漁獲物生産を担う担い手として最初に認められだしたのは、江戸期の重要輸出品「俵物三品」の一つにアワビがあったことによる。中世末にはじまる、鐘崎（現・宗像市）の海女が対馬や日本海東方へ移動をするのは、アワビが交易品としての価値を持ちはじめたことによるのではないだろうか。鐘崎海女は、山口県油谷大浦、鳥取県夏泊、福井県三国などに移住の痕跡を残し、江戸時代初期、石川県輪島に至ったとの伝承をもっている。

海女が潜水してアワビを獲る絵図がはじめて描かれたのは「日本山海名産図絵」（宝暦4・1754年）で「伊勢蜃」と題記があり、2人の海女が潜り、男が船上で作業をしている。これ以降、浮世絵等に多く海女が描かれるようになるのは、海女の活躍が活発化していたものの、一般の民にはその様子が知られることはなく、それを浮世絵師が興味ある画題としたのであろう。

明治10（1878）年代になると、ガラス製メガネが使われだし、アワビが乱獲気味となり一時メガネは禁止された。20年代には、大浦（山口県）海女の鬱陵島進出を嚆矢とする日本海女の朝鮮半島への「出稼ぎ海女」の進出がはじまる。殖産興業を立国の旗印とした明治期に、海女は漁業の場で注目を浴びる存在となったのである。若い海女の国内での出稼ぎも盛んであった。また、この時代、志摩半島では真珠養殖の成功があつて、母貝採取に海女が役割を果たした。しかし、海女の海外出稼ぎは太平洋戦争の勃発を期に終わる。

大戦直後、志摩半島はもちろん、潜水漁業の適地漁村では女性の多くが海女になった。漁業は食糧生産の場で重要な役目を担ったのである。間もなく男たちは「沖合いから遠洋へ」勢力を拡大し、日本漁業の最盛期を呼んだ。沿岸の海女漁は、昭和40（1965）年代後半から50年代前半、好景気がアワビの値段を高価なものにし、海岸地の観光地化もあつて需要は限りなく、アワビの乱獲をきたしたが、得られた収入は大きく、生活環境や教育など、海女漁村の近代化をも一気に進めたのである。

「潜りつづけて1万年」の海女の歴史は、単なる食糧確保の漁撈採取時代を経て、アワビ、ワカメなどの海藻を朝廷・貴族の不老長生の妙薬として漁獲物しつづけた時代を経、やがて商品経済の担い手のなる時代まで、漁具漁法・技術にはほとんど変化、改革なく現在まで延々と存続しつづけてきている。こんな不変な働く人々の世界がどこにあるのか。しかもその主役が女性の海女であったことは驚嘆すべき事実である。

海女は長い歴史を生き抜いてきた。

この不変であった海女の世界に、昭和50（1975）年代に入ると、大きな変化がはじまった。資源の減少がはじまり、海女が減少しだす。高齢化が進み、後を継ぐ後継海女の少ないことが危惧されだした。

平成になると、海女消滅の危機が云々されるようになった。しかし、海女が漁村で担っている表面に出ない役割は認識されず、漁業の現場で、海女の存在の大切さを発言することは無かった。近年、沿岸漁業資源の枯渇が明らかになりだして以降、多くの地で海女が観光資源として注目されはじめてきたが、本来の漁村、漁業現場では海女の存在意義は忘れさられたままである。

あらためて海女の存在意義を見つめ直し、これからの時代に地域漁村および漁業においてどのような役割を担い得るか考えてみる。

①“素潜り”は海女のもつ独特な技術である。

呼吸法と潜水時間には肉体的な多少の差はあるが、昨日今日潜水をはじめた人や海嫌いな人を除いて、子どもの頃から海を遊び場にしてきた海女の子たちに根本的な大きな能力の差はない。海女の潜水作業時間はほぼ 50 秒である。短いように思われるが、海水中で絶えず体を動かし、神経を集中する作業は多くの酸素を消費し呼吸時間を短縮するので、ほぼ 50 秒が限界だ。長年の度重なる潜水から得られる経験と多大な知識が海女の技術を磨き高める。潮の流れ方向・強弱、波の動き、干満などに対応する能力は長年の経験と適応する技術による。水温など透明度をはじめ海水の状態、深浅、岩礁の形、海藻の種類や繁茂の状況とアワビ、サザエなどの生息場所の見分け、時には危険な海底域の発見もある。これまた単なる潜水を越えた数々の知識の蓄積が海女を優れた潜水技術者に行っているのである。新しく海女に参入した人がいても、古い海女になかなか追いつくことができない。

潜水機器が発明されて潜水病が人の命を奪っても、素潜りの海女には無縁だった。“素潜り”は海から生まれた人間が本来持っている自然な能力であった。

②男の海士がいたにかかわらず、海女が数千年にわたって存続しつづけてきたのは、海水中での漁撈に適した、女性としての2つの特性があったからである。

1. 肉体的に男と比較して、低水温に耐えられること。
2. 根気良く、持続性のいる作業をつづけることが出来る性格。

「夏は海の中にいるほうが涼しくていい」という海女もいるが、アワビなどの生息する海水温度は 13℃ ～23℃ と基本的には低い。出来るかぎり長い時間この低水温下で作業を続けたいのが海女である。出漁の朝や漁の終わった海女小屋には焚火が焚かれ、近年は温水のシャワーや風呂が用意され、海女が暖をとる姿が見られ、体温の保持がいかに海女にとって大切かをうかがわせる。近年は資源保護のために、作業時間が制限されているし、昭和 30 年代からウエットスーツの着用がはじまり急速に普及して、寒さから相当に緩和されたが、まだ完全に防寒されてはいるわけではない。

もう一つ、海女が主体的に存続した大きな理由がある。男が体力を要する、しかも儲けの大きい大規模漁法に携わるようになった時、仕事上の棲み分けができた。網漁具・網漁法の発達により、大量漁獲が可能になるとともに、漁獲物の消費が著しく増加し、流通経済が暮らしを巻きこんでいった。男は大きな収入を求めて、漁業でいえば大きな魚群の大漁を狙った。そのため沿岸での磯漁業は女の仕事になった。女性として、育児、家事、農作業等と陸から近く、労働時間の短い海女作業は磯の漁業と両立し易い。沿岸での素潜り漁が女の手にはゆだねられるようになった。

③海女漁法は究極の原初的自然漁法である。

明治以降加わった新しい道具はメガネとウエットスーツおよび同時に使われだしたヒレと重り（腰に巻く）のみで、他に近代的な道具を使うことなく、大きなエネルギー負担のかからない漁法のまま今日まで存続している。例外的に近年、船を使った潜水作業で、浮上時の綱の巻き上げに動力が使われているが、それだけである。今風にいえばこれほど「エコな漁法」はない。海女は会得した素潜りという技術を駆使して、しかも自然の中で、自然の獲物を得る。

明治 10 年代に、潜水器によるアワビ採捕がはじまったが、どこでも海女の漁場を侵すことはできなかった。海女の潜れぬ深い海底か、海女のいない海でしか許されなかった。乱獲を心配する海女の強い

抵抗に遭った。伝統的に海女の漁法は“素潜り”であり、素潜りという呼吸の限界を設けることにより、対象とする資源の維持をはかり、漁に持続力を持たせてきたのである。

さらに、海女の漁獲物はすべて海の幸、海からの贈り物である。海女漁には漁獲物にかんして、特に次の世代を残す大きさまでは取らない決めごとが厳格に守られる。ほかに漁獲時期、操業期間・時間など、とり過ぎないための多くの約束事が決められ、守られてきた。もちろん操業の安全は第一に考えられるから荒天の無理な操業はしない。漁獲の公平を期するため、祭りは当然だが集落に目出度いことや不幸が有った時も沖にはでない。

守る海女が女性であることは、男性と比べて決められた仲間の間の約束事を破らない従順さと、生き物の命が継承されていることに対する本能があったからこそ、この長い歴史を重ねてこられたのであろう。

④海女が漁獲、採捕しているのは総て自然なる海の生態系が生み出す動植物である。

言うまでもないが、海其自然環境によって海女は暮らしている。

新しい時代、海女の環境保全活動へのより積極的な参加が求められる。より進んだ海女の環境保全活動として、海女に環境監視人の役を負って欲しい。唯一海水中を毎日自分の目で見ているのは海女を置いてない。海女のメガネに小型軽量の自動観測装置をセットできないものか。海女の負担にならない範囲で、映像や水質計測の装備は不可能だろうか。

海女の多いところは半島の先端とか陸地でも海流に突き出たところが多い。それらの海は都市化や鉱工業地帯化からは遠く、海域が汚染されることなく、豊かな海の幸に恵まれている。豊かな海には複雑ではあるが、多くの魚介類を育む生態系が保たれている。とくに海の森である海藻の海中林は重要である。ただ、これまで海女漁において、海藻の採取は経験的にのみ行われてきた。海中林の人間による管理という考えはまだないし、実践もされていない。志摩半島におけるアラメ採取についても、アラメの経済的価値から決められるのみで、アワビの生育にはたす役割、さらに生態系における役割の評価が行われたことはない。漁業と漁獲物である動物・植物との共存関係について、これからより進んだ研究がおこなわれることが期待される。

⑤海女の存在形態は多様である。

一年中潜って海女だけで稼ぐ専業海女は少ない。アワビにしる海藻にしる漁期があるから、漁期以外は他の仕事に就く。多くの海女のいる漁村は当然他の漁業も営んでいるから、海女だけに頼っているわけではない。年間 130 日も海女に出るところもあれば、20 数日のところもある。20 数日の海女は当然他に仕事を持っている。日頃は会社勤めもいれば保育師や民宿を営む者もいる。この多様さが今日的職業観から見て海女の弱点でもあり、逆に、したたかな強さにもなっている。

「あなたの娘をどうして海女にしなかったの」という質問に、海女の収入は不安定という答えと、職業は子どもに選択させるからという答えがある。前者の答えが大半であり、海女漁のこれからの問題点、方向性を表わしている。

ほんとうに海女は不安定な仕事なのだろうか。たしかに季節により漁獲物は異なり、年による漁の変動も大きいし、値段は絶えず上下している。しかし、年間に均すとそれほどの大差はない。さらに数年でいえば、差はもっと近づく。サラリーマンの月給制と比較するから不安定と思えるに過ぎないのだが。今、記した 20 数日の海女でも、その収入は 50～100 万円に達するから年収にすれば相当な割合を占める。

海女漁が出来るということは、漁業をする権利があることを示しており、彼女が漁村で暮らして行ける可能性が大きいということだ。海女を月給とりと比較するのは止めることが大切であろう。小さいながら畑や時には田を持つし、漁獲物の簡単な加工や販売もある。昔と比べると、売れなくなったり、食べなくなったりした、少量だが多種の未利用の海女資源がある。大量に生産し大量に販売するスーパーやディスカウントストアのやり方から開放されれば、海女の周囲には多くの可能性がある。

⑥漁村は漁業を生計の柱とした「共同体」で成り立っている。

その共同体の要になっているのが女性であり海女である。海を仕事場とする男は魚群を追って駆け巡り、養殖業を除くと、農業林業と違って一定場所に留まることができない。反対に女である海女は家を守り、共同体を守る。漁業の機械化が進んだため、共同作業が少なくなり個人的になってきたが、それでも漁業権は協同組合という集団が保持しており、共同体から外れては存続し得ない。また漁村は隣村から離れて孤立したところが多い。多かれ少なかれ共同体として事態に対処しなければならない場合がほとんどである。その共同体の半分は女性である。

これまで女性は収入を持っていた、ましてや収入を持たない場合、男社会の影に隠れて表立って来なかった。大きな独立した経済力を有する海女が発言力を持たずにきたのはどうしてであろうか。この殻を海女が率先して破る時代が来たのではないだろうか。

海女の後継者の問題

近年の海女の減少と後継者のない問題に関して、短く触れておく。現役の海女に云わせれば、一言である。

「今からは海女ではメシが食えん」「海女の収入は不安定だ」
すなわち十分な収入がないことを云う。

その考えがどんな意味と内容を含んでいるのか、深く検証してみる必要がある。だがさらに海女が口にしない大きな問題点がある。

「海女の漁業権がはっきりと規定されていない」ことである。全国の多くの漁村で、海女個人が独立して漁業権を持っているところは稀である。千葉県白浜や和歌山県串本、大分県臼杵などが少ない例である。

三重県鳥羽市の場合、ほとんどの地区が「家」で漁業権を持っている。家が持っているということは家長が持っていることになる。家長の妻と子どもがその漁業権の内に含まれる。だから妻はたとえ外部（漁業地区の外）から嫁入りしてきても、やろうと思えばすぐ海女に参入できる。しかし反対に外部へ嫁に行けば、即漁業権すなわち海女の権利を奪われる。

最近まで「女の子が生まれると赤飯を炊いて喜んだ」し、結婚しても第一子が生まれるまでは男が女のところへ通った通い婚の習俗が有ったそうだが、それは結婚が地域内で行われるのが普通の時代のこと、および女の子は小学校を出ればほぼ海女になる暗黙の了解があったためである。しかし、より根本的な就業、結婚、家族制度などの変革が起こっている。

①社会制度の変革

近年大きな変化がはじまっている。男女ともに高校、大学へ進学するようになったし、就職も地区外へ求める。さらに結婚を地区同士ですることは少なくなった。多くの女の子が外部へ出てしまう。通婚関係が大きく変わった。

ある地区で長男のいる漁家の女の子で海女をしたい子がいる場合、彼女が結婚しないかぎり海女を続けることができるが、嫁いだ他家に漁業権が無ければ彼女は海女を止めねばならない。たとえ同じ地区で結婚しても、相手の家に漁業権がなければ、彼女は海女漁をできない、ということも起こる。

多くの海女の後継者を阻む漁村社会の有り方についても再検討されなければならない。

漁が終わったあと、海女小屋で寛ぐ海女の大笑いする顔は、天性の朗らかさと楽天的な性格を表わしている。海女の仕事は厳しい過酷だ、というのは海女を知らない人だ。現代人が失ったもの、自然のなかで自然とともに生きる、機械に支配され命令されることのない人間がいる。

海女を現代的なルールに馴染ませようとするのではなく、伝統的なやり方を現代的に進化させて、海

辺漁村、沿岸漁業再生の『海女モデル』をつくっていいのではないかと。それは日本の地域再生のモデルでもある。

済州島海女唄披露

（海女サミットと同内容のため省略）



パネルディスカッション

会場

妊娠したときに鮑を食べるとききますが、どこでもそういう言い伝えがあるのでしょうか。また、鮑のない時期はどうしていたのでしょうか。

答志海女

目がよく見えるようにということで、妊娠したら赤い鮑と黒い鮑を両方食べます。

石原

志摩半島では鮑は傷が治りやすいと言います。私の父親は 95 歳で亡くなりましたが、歯がなくて食べられないので、鮑をおろし金でおろして食べていました。非常に贅沢で、長くは続きませんでした、すごく元気になりました。この中に栄養学の先生がいるかどうか分かりませんが、非常に栄養的にいいものです。今の質問の中で分からなかった、鮑のない時期にどうしていたか何か情報はありますか。

司会

国崎で昔、鮑を糠床に入れて保存したらしいですが。

国崎漁業者

昔、鮑がたくさんあったときには傷物の貝をドブヅケ（糠付け）にして食べたというのは聞いています。妊娠した人には、よそへ出てっている人にも鮑を送ります。

会場

海女さんたちの文化に非常に興味がありまして、特に世界遺産に韓国の方と一緒に日本の方が登録しようということに非常に興味があります。といいますのは、一つの国が一つの文化を持つというのが今までのルールだったんですけど、ふたつの国が一つの文化を持って世界に向かって発信していくというのは面白い。で、今日の先生方の話を聞いて非常に面白くイメージがどんどん変わっています。今「きれすぎる海女さん」とか、私も嫌いではないんですけど、ちょっとエロチックに強調するような部分があったんですけど、もともとは身体的に潜るのがすごい驚きという、それがあったというのは、塚本先生の話のきいて非常に驚きました。1 年前に海女さんに「なんで海女さんをやっているんですか」ときいたら「楽しい」と言うんです。「海に潜ると毎回毎回驚く」と。で、今日の先生方は学者さんですから「楽しい」とか「うれしい」という言葉は使われない。やはり「持続的発展」とか「自然を守る」とかそういう客観的な言葉でおっしゃっている。で、この「楽しい」とか「うれしい」とか、「これが生きがいなんだ」という感覚を、学者さんは救い取れないんじゃないか。どうやったら救い取れるんだというのを教えていただきたい。私だけではなく海女さんたち自身が「私たちが楽しいというのをどうしてあなたたちが言えるの」と怒っていただけるとありがたい。

塚本

海女館の水槽の中で潜る観光海女さん達を見る人達は、やはり拍手喝采だったわけですね。そして演じる海女さんたちも、結構楽しかったのだと思うのです。たぶん自慢げに誇り高くやっておられたのではないかな、とも思います。ただそれもふたつの系統がありまして、客が投げたお金を拾ってくるといった形態にはやはり少し抵抗があり、一方で観光客の望みに応じて舟に乗せてやり、潜って貝を採る様子を見せてやるというのは、区別すべきでしょう。後者はまさに自分の生業に誇りを持ち、自慢する心境もあったと思います。

福井海女

福井の東尋坊で潜っています。先ほどお金をとることにちょっと皆さん反応が悪かったんですが、東尋坊は岩が 30 メートルあって深さも非常に深いところで、そこできらきら光るお金を拾うということは自分の技術を誇るという意志が先輩方にはあったんじゃないかなと、だから金銭的なことに対する執着なんかなかったと思います。下にあるものをとるというのではなく、落ちていく動くものを追っかけてとるという技術に対して誇りがあったと思うので、そこはちょっと違うと思います。

塚本

失礼しました。なるほど、そういう技術については知りませんでした。ただですね、あそこで紹介したのは、中村稔さんが「哀れな」というイメージで詩を作ったということ、もうひとつは、東尋坊の海は確かに深いので私もちょっとおかしいなとは思ったのですが、同様な見世物は鳥羽志摩にもありまして、観光客が実際の海女にお金を投げるのが当たり前になり、逆に海女さん側が観光客にお金の投げ入れをせびるということもありました。それはやはり、本来の海女さんの姿とは違うのではないかな、という思いがあります。

会場

志摩の海女さんも福井の海女さんも済州島に戻る事が出来るのか。鐘崎は日本の海女さんの中心だけど、古い伝承からすると鐘崎の海女さんは済州島から来たという伝承があるが。

石原

私のまったく独断と偏見で申しますと、海女の歴史はたぶん数千年はくだらないだろうと思っていますが、たとえば鮑おこしは北の方が多い。だが、その鮑おこしが本当に鮑おこしなのかどうかということも考古学の素人なので分からない。鐘崎の海女が西と東に移住したのは先ほど話したように 1600 年代の前後になるので、古代で考える材料にはならないのではないかと私は思っております。その前によく日本民族が中国あたりから段々移ってきたというお話がありますが、それはもう歴史の大先生方のお話であり、それを裏付けるようなお話にはならないと思います。先ほど申し上げたタンラという言葉が済州島でありながらこの志摩半島にも使われているという、それさえ解明できていないので、大変残念ながら申し訳ありませんとお断りするしかありません。

会場

裸で潜っていたというのは年代によって何か一覧で確認することはできますか。

石原

今特別展をやっていますが、あの特別展の中に絵がたくさんあります。あの絵の中で上半身の海女着を着用するようになるのは、明治 16 年の水産図解でもまだ裸なのでそれ以降になると思います。あれ以外に海女着の変遷を追っかけるラインは残念ながら私も持っていません。

会場

私の友達は 40 代ですが、彼が小さい頃千葉の海女さんはまだ上半身裸で潜っていたというのをきいたので、最近まで裸で潜っていたのかききたいのと、石原先生の資料の写真で白い上着と紺のもんぺを履いているのがありますが、あれはなんだろうというのと、海女さんたちにとっては裸で潜る心地よさというのが本来あるのか、衣類を着るより何も着ないほうがいいのか。

答志海女

岩の下に入ったりするので、身体に傷が付きますわね。だから私ら着ないで潜ったことがないので分かりませんが、私たちは奥の鮑を採るために岩の中に入って操業しているので、岩にあたったら全部傷する。今でもウェットスーツは傷だらけです。だから裸では考えられませんねえ。昔の人は見えるところに鮑とかサザエがたくさんいたと思うけど、私らの年代になってから少なくなって、岩の中まで入って採るようになったので絶対裸ではダメだと思います。

石原

志摩半島の人が海女着を着るようになるのは明治 13 年頃だと思う。それは日本人が朝鮮半島に行くようになって、朝鮮半島の人全部海女着を着ていたらしいです。それを見習って着るようになったということです。それ以前はたぶん着ていなかったと思う。それはなぜかという、木綿というものがそんなに安いものではなかったんです。労働着として着られるほど安いものではなかったと考えています。

菅原

私は建築屋で、磯着の話は分かりませんが、今の話を聞いていて海女小屋のことに連想がいきましました。半裸状態で潜るのであれば、海女小屋なんて必要だったのかなと思うんです。本当に風除け程度のもので済むのであれば、がっちりした建築なしでも十分だったのではと思います。海女小屋も古いものはなくて、よく実態がわからないのですが、海女小屋の発展を磯着との関連で考えて行くことも必要だと気付きました。

塚本

江戸時代までは、絵画資料に描かれるように半裸体で潜っていたことは間違いありません。海女小屋ではなく、浜で火を焚いて暖まっている様子などが、明治前期にでも描かれています。戦後になっても、聞き取りなどで知られる限り、ウェットスーツが普及するまでは半裸体が一般的だったのではないのでしょうか。むしろ海女さんたちにお聞きしたいのは、磯着と半裸体とで、どちらが潜りやすいのか、という点なのですが。

司会

関連ですが、展示品に明治 35、6 年に答志島の海女の姿をイギリスのカメラマンが写真を撮っていますが、それに出てくる海女さんは全部上半身裸です。それと三重県の水産試験場の明治 33 年の資料に鳥羽市の 3ヶ所の海女の写真が出てきますが、それも全部上半身裸で、おそらく明治 30 年代だと思います。

会場

昭和 54 年に中村由信さんが「海女」という写真集を出しているんです。そこで対馬の曲漁港と御蔵島の方は、昭和 37 年の写真ですが全員上半身裸で写っています。だからその頃までは部分的に上半身裸の海女さんがいたと思います。全国の海女さんが載っているものでぜひご覧になるといいと思います。

会場

この 20 年くらいの間に田んぼが耕されなくなりました。海女が暇なときに今何をやっているのでしょうか。もう一つは磯笛ですが、綺麗な磯笛を期待していくとほとんどのところが「はあ」というため息のように聞こえるんです。石鏡では磯笛を聞いたことがありますが、他ではほとんどないので今どうなのかなということです。

答志海女

海女の時期は海女をして普段は自営業です。答志は夫婦舟なのでいっしょに漁に行っています。農業はあまりしていません。

国崎漁業者

国崎は半農半漁で、鮑は 35 日くらい、なまこ漁は 30 日くらいで、合間にとこぶしなどは採りますが、海女に行かない日は畑に行ったり、田んぼへ行ったり自給自足という感じです。

司会

磯笛について、石鏡はあるが、その他はあまり聞かれないということですが、もう少し南の志摩半島の方へいくときれいな磯笛がきけるかもしれません。

今日はミキモト真珠島の松月さんも来ていただいていますので、塚本先生のお話も含めて一言お願いします。

松月

今年はミキモト真珠島へ5人の新人海女さんが入りました。我々は観光であり、昔の真珠養殖の時の海女の作業をご覧いただいています。そうするとまず綺麗に潜るということを教えます。何が綺麗かと言いますと「潜るときに足をそろえて入る。」「上半身だけでかいて潜る。」この辺をうまく出来る海女さんが我々の一番の海女さんです。今年入った5人の海女さんも段々上手になってきました。彼女たちが海女を志望した動機というのが、そういうふうに綺麗に潜ってお客様から拍手をしてもらう。純粋に人に見てもらって喜んでもらう。そういう動機を持って入ってきている。それが観光海女です。また、真珠博物館では、こちらとは違った観光海女を中心とした展示をしておりますので、時間がありましたら来場ください。

菅原

先ほど石原先生が地域の海女モデルの構築ということをお話になられたが、非常に印象に残っています。改めてお話いただきたい。

石原

私が最後に申し上げたかったのは、海女さんがもっと表に出て中心になった地域の漁業形態が出来ないかということです。今は実際に会議でもなんでも海女さんは表に出て来ません。漁村というものを動かしているのは男の人ですが、海女さんが今まで何千年も続いてきたという事実の中にすごいエネルギーがあって、海女さんが元気で朗らかで、素晴らしい技術力を持ちながら暮らしていて、そのことを海女モデルとして、漁業だけでなく漁村の核というものが作れないかという趣旨です。

菅原

私も今の石原先生の話にかなり共感します。元気な海女さんという存在がいて、漁村の持っているいろんなものを結び付けるという、それによって海女さんだけでなく漁村そのものを生き活きたものにしていく、海女がそういう大きな可能性を持っていることを確認できたことは、今日の大きな収穫と思います。

会場

私は済州島の海女の研究をしているんですけど、済州島でも後継者がいないんです。娘さんが海女を継がない。こちらの方でも海女さんの後継者対策はとられていますか。

石原館長

明日のサミットに三世代海女というのが出てきますから、ぜひお聞きいただければと思います。いつやるということではなく、勝手にやっているんです。子どもたちが本当に海女になりたいと思ったときは、その子どもたちがみんな勝手に海女になるんです。ですから技術継承をわざわざしているということは特にないと思います。採れる場所等はかなり教えていると思います。

答志海女

私たちが若い時は、親から海女の技術を教えてもらおうといけないといわれました。どういう謂れか分からないがそうきました。私のお母さんはあまり潜らなかったのですが、潜っているよその人の技術を盗むというのか、見て自分がそれを盗んでうまくなっていくという感じです。自分で考えて段々うまくなっていくということです。

司会

他になければ最後に先生方に一言ずつお願いします。

塚本

先ほどの後継者問題ですが、そのためにも海女という生業に誇りを持てるように、海女漁をひとつの文化として評価することが大事だと考えます。世界遺産というのは少し遠い目標ですが、まずは県、国の指定から始めたい。文化というと、何か芸術家の絵画とか音楽とかいったものをイメージしがちですが、そうではなくて、人びとの日々の営みのなかで生まれた、その地域にとってかけがえのないもの、それ自体が文化なんです。無形文化遺産というのは、そういう考え方に基づいたものだと思います。この海女サミットを3年間やってきて、海女の歴史性や生業としての特異性、かつ鳥羽志摩での海女の特質など、非常に個性的で面白いのですね。このかけがえのなさを、もっと皆さんに知って頂きたい。

これまでは、海の博物館と鳥羽市、志摩市さんが頑張って下さって、3年間海女サミットを続けてきました。これからは、三重県にかけがえのない生業文化として、三重県の文化として、位置付けて頂きたい。海女さんは日本の各地にも残っていますが、まず三重県を突破口にして保全を考えたいものです。今日は三重県の職員さんも議員さんもいらっしゃっていますが、三重県の責任において、文化財登録に向けて取り組んで頂きたいと願っています。

菅原

私が海女に一番惹かれるのは、人間がじかに自然に向き合って収穫を得るという本当に自然な形があるということです。それは生活そのものであるし、非常にやっていて楽しいものでもあります。志摩にはこのような人間と自然の関係が未だにあり、そしてそれがこの地域の大きな特色とも魅力ともなっています。このように自然とかかわっている人の暮らしの象徴的なものとして、海女が捉えられるのではないかと思います。実際にそのような営みをしている海女さんの肉声をもとにして、次のステップに進んで行くことが必要ではないでしょうか。客観的に見て、今足りないのは海女さん自身の声であり、海女さんの経験に学ぶことではないかと思います。まずは、この地域の海女がどのような存在か、また、海女の将来像について当事者の海女はどう思っているのか、きちんと捉えていく、そのために必要な地道なことをまずやっていかなければなりません。

その次に実際に海女を活かした漁村をどういうふうにして再生していくのか、それぞれの漁村や三重県、国の問題として、それぞれが何をやっていくのかを明確にしていく必要があります。

済州道の海女文化条例の優れている点は、海女を文化としても産業としてもきちっと残していくのは済州道の知事の責務であるとうたっていることです。一方で、海女に関する基本的な調査研究は海女博物館が核になって蓄積していく、このような基礎的なことを積みあげて、次の展開に繋げていくという姿勢には学ぶべきものがあります。

石原

海女ほど女性が主役で長く続いた生業というか、産業はないと思います。近年、女性の活躍はあらゆる分野でめざましいものがありますが、自然を相手にし、自然に依存した生業は海女くらいのもんです。男の社会では、経済的な競争の結果、戦争になったりすることがありますが、海女たちは獲物をとるために競争はしますが、決して殺し合いの競争に至ることはありません。だからこそ持続的な素潜り漁法を長い間続けて来れたんだと思います。そんな海女さんを応援して行きたいと思います。

海女サミット 2011 前夜祭 海女交流会

10月29日、全国・地元海女60名をはじめとする約130名が参加し海女サミット2011前夜祭として海女交流会を実施しました。

当日は地元相模町内会、漁協、地元海女さんのご協力による、相模町の郷土料理で全国の海女さんをおもてなしいたしながら親睦を深めていただきました。

そして、地元海女による相模音頭、答志小唄、石鏡音頭や済州島海女唄を披露いただき、普段交流する機会のない全国の海女さん同士が温かい絆で繋がった前夜祭となりました。



石鏡音頭



済州島海女唄



答志小唄

相模町視察

10月30日、記念放流の前に、前日から宿泊していただいている全国の海女さんを中心に、相模町の海女関連施設を視察していただきました。案内役と説明は、相模町内会さんにご協力いただき、相模海女文化資料館、神明神社（石神さん）、五佐屋、相模かまどなどを見学していただきました。



相模海女文化資料館にて



全国海女に説明する答志海女



かまどへ



海女の家 五佐屋にて

記念放流

海女サミット2011を記念して、鳥羽市相差町の皇子御（おぜご）さんという漁場へ、海女さんたちによるアワビの稚貝を放流していただきました。

放流に参加いただいた海女さんは、全国を代表して石川県輪島海女さん5名、千葉県南房総海女さん1名、福井県三国海女さん2名、福岡県宗像海女さん1名、佐賀県玄海海女さん1名、韓国済州道海女さん3名、三重県志摩海女さん2名、地元相差町海女さん8名の合計23名のみなさんが、それぞれご自身の道具を持参いただき、潜水していただきました。

当日は、低気圧の通過により、どんよりとした天候とともに、結構うねりがありましたが、海女のみなさんは、そんなことはお構いなく、笑い声を上げながら沖へ向かいました。

3,000 個の稚貝を丁寧に岩の隙間にくっつける作業を潜水によって行いますが、日本全国の海女さんと済州道の海女さんが一緒になってこの作業をやるというのは、おそらく今回が初めてのことだと思います。写真家や研究家の方々も一緒に潜っていただきました。

済州特別自治道海女さんのオヨンスさんは、近年済州島では少なくなったアワビが、相差の海には「たくさんいた」と興奮気味に話を聞かせてくれました。



記念放流



アワビがいたというオヨンスさんとキムヨンヒさん



記念放流に参加いただいた海女のみなさん

また、海女サミット2011記念放流では、主会場の相差町のほか、後日、国崎町、石鏡町にもアワビの稚貝を放流させていただきました。



国崎支所での稚貝引渡し



海女さんによる放流準備



国崎での海女さんによる放流



石鏡での海女さんによる放流

海女サミット2011 日本列島海女さん大集合

1. 歓迎アトラクション

そして、午後からの日本列島海女さん大集合です。
当日は、全国 13 市町村から 78 名の海女さんに参加
いただき、346 名の方に聴講いただきました。

オープニングを飾っていただいたのは、地元相差町
の神明くじら太鼓のみなさんで、迫力のある演奏を披
露いただきました。神明くじら太鼓は、和太鼓演奏を
通じて町の活性化を図ろうと、2008 年の地元のくじ
ら祭り 20 周年を契機に町民により結成された太鼓チ
ームです。



神明くじら太鼓

2. 大会宣言



石原実行委員長

（石原実行委員長：以降（石））

第 3 回日本列島海女さん大集合を開催します。

（全国海女の紹介：石川県輪島市、千葉県南房総市、静岡
県下田市、福井県坂井市、和歌山県串本町、徳島県美波町、
鳥取県鳥取市、山口県長門市、福岡県宗像市、佐賀県玄海
町、長崎県壱岐市、三重県志摩市、三重県鳥羽市）

現在日本には 18 県に 2,174 人の海女さんがおいで
になります。その中で本日 12 県の海女さんにおいでいた
だいております。

残念ながらお誘い申し上げたんですが、東日本大震災のために岩手県久慈市と宮城県石巻市の海女さん
が、みなさんによろしくとお伝えくださるよという伝言をいただいておりますが、本日はご欠席
でございます。

さらに本日特別に韓国済州特別自治道からも海女さんにご参加いただいております。

本大会を開催するにあたり、主催者である鳥羽市、志摩市の市長さんをはじめ、今日は大変多忙な中、
海女応援団長として三重県の鈴木知事にもおいでいただいております。

さらにこの会の意思に賛同していただき、山川豊さんもわざわざ駆けつけていただいたわけござい
ます。ご存知のようにお母さんが海女でいらっしゃるということです。

それではこれからの時間皆さんと歓談を続けていきたいと思います。

3. 挨拶

鳥羽市長挨拶（抜粋）

今大会へ飛行機で来られたかたもいると思いますが、上空から鳥羽志
摩を見ると、青々した木々が一杯で自然に恵まれているように感じます。

しかし、山に入ってみると、大きな木々の下は光があたらないため、
低木や草木が育たない状況にあり、餌がなくなった鹿や猪などが民家に
近づき、獣害を引き起こします。また、生い茂った森では、雨が降って
も雨水が木々の葉から蒸散してしまい、地表に浸みいる水が少なくなっ
てしまうと専門の先生方は話しています。このため、昔はたくさんの水
が流れていた川も、現在では以前のような水量がなく、山々の栄養分も



木田鳥羽市長

必然的に海へ流れなくなり、磯やけや藻場の減少に拍車をかけ、このことが漁獲量の減少となって海女漁をはじめとする水産業を営む方々の生活にも支障を来しております。鳥羽市では、自然林の木々を伐採することによる生態系の回復と新たな雇用の創設を目的とし、本年度より「森と海・きずな事業」を実施しています。大きくなりすぎた木々を伐採することにより、木々の下には草木が蘇り、鹿、猪なども山に帰るとともに川の水量が増え、海へもたくさんの栄養を運ぶことで海女漁等の水産業にも好影響になると考えます。さて、現在韓国済州島と鳥羽・志摩が連携し、この「海女」という価値ある文化資源を「ユネスコ無形文化遺産」に登録しようと取り組みを始めています。鳥羽・志摩は、全国の海女の半数以上が活躍している地域であり、この地から、実現を後押しする力強い流れをつくり出していくため、本サミットが大きなステップとなることを願っております。

志摩市長挨拶(抜粋)

私は、海女漁と海女文化を育んできた志摩の海を「新しい里海」という理念と考え方でとらえ直し、この豊かな海を守り維持し、海女の文化伝統と共に後世に引き継いでいかなければならないと考えております。「新しい里海」とは単に海を保全するだけではなく、人の手で海を守り、耕し、造り、育てるなど、適正な管理をしながら海の力強い生命力を増嵩回復させ、海と人が、豊かに共生していくことを言います。私はこの考えを「稼げる・学べる・遊べる、新しい里海の創生」と名付け、将来に向けた志摩市のまちづくりの経営哲学と位置付け、志摩市再起動を進めていこうと現在取組んでおります。自然と人が豊かに共生する関係を再生するためには、森、里山、里地、川、海辺、そして海へと続く太くてなめらかな資源循環をみなが理解して、そのうえで総合的に問題や課題を解決していかなければなりません。海女の漁法と文化は、まさに海と人の共存・共生を原理原則として今日まで受け継がれてきた理想に近い漁業であり、「里海」の歴史そのものであります。この海女サミットを通じて海女漁の素晴らしさを世界に伝え、世界遺産登録に向けた動きが活発になること、そして海女の後継者が育ち、産業として成り立つことを、私も「里海づくり」を進める中で共に実現していきたいと思っております。



大口志摩市長

三重県知事ご祝辞(抜粋)



鈴木三重県知事

私がはじめて鳥羽志摩の海女を見たのは、小学校の修学旅行で鳥羽に来た時でした。そして、海女を世界遺産にするんだということを公約に掲げ知事に当選しました。海外のマスコミのみなさんに三重県のことをPRしていますが、いつも聞かれるのは海女と忍者のことなんです。そのたびに海女は、大変な厳しい環境の中でもがんばっていただいている、そしてすごい技術があるということをPRしています。

しかし、観光の面でも「かまど」などで地元の海女さんががんばっていただいているのに、みんなで応援していく形になっていない。どうすれば世界遺産に登録していけるのか、世界遺産に行く前にまず三重県はどうなっているのかを調べましたが、何もないのです。

まず自分の足元をしっかりと固めなければということで今調査をしており、必ず1、2年後には三重県の文化財指定が出来ると思います。

まずは県の無形文化財にしっかり登録できるように私もがんばります。東日本大震災以降、みんなが絆やつながりを大切に思うようになってきました。全国から共通点をもって集まっていただき、鳥羽志摩で絆を確認しあっていることを本当にうれしく思います。皆さんとともに世界遺産登録が、そしてみなさんの生活が、人生が、最高のものになるということを強く信じて、いっしょになってその

夢を叶えていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

4. 詩の朗読

第14回マリン文学賞「海の香りのする詩」市内小学生の部大賞作品朗読

鳥羽市立弘道小学校 6年生 世古千晶さん

鳥羽市では毎年全国から海に関する詩を募集するマリン文学賞というコンクールを実施しています。昨年市内小学生の部で大賞を修めた世古千晶さんに詩の朗読をしていただきました。

ばあちゃんと私のひじきとり

初めて乗る船。

船は左右にぐらぐらゆれ、私は船にしがみつく。

でもばあちゃんはぜんぜん平気。

船が海をはじいていく。

岩にはひじきがいっぱい。

黒い黒いジャングル。

ばあちゃんは平気で、そのジャングルへ入っていく。

岩はゴツゴツ、足のうらが痛い。

ザクッ、ザクッと、ひじきをかりとる。

私は必死。ブチッ、ブチッと、ひじきを手で引く。

ばあちゃんの早さにはぜんぜんかなわない。

ばあちゃんはどんどんジャングルを進み、ふくろいっぱいひじきをつめこむ。

いつものばあちゃんとはどこがちがう。

ばあちゃんは楽しそう。

ひじきをふくろにつめこんで、「こんなにとったぞ」と自まんげに、私の方を見てほほえんだ。

しお風がばあちゃんと私を包み込んだ。

黒いジャングルが、すっかり岩場にかわった。ばあちゃんはすごい。

いつか私もばあちゃんみたいに、ザクッ、ザクッと黒いジャングルをかりとってみたい。



弘道小学校6年生 世古 千晶さん

インタビュー

(司会) おばあちゃんはひじき取りの名人ということですが、おばあちゃんは海女もされるんですか。

(千晶さん) はい。

(司会) おばあちゃんのどんなところが好きですか。

(千晶さん) いつも一生懸命働いているところが好きです。

(司会) ぜひこれからも海辺のまちでおばあちゃんと素敵な時間を刻んでいってください。どうもありがとうございました。

たんです。それを見た親父が竿で「バーン」とお袋をたたいたんです。それが怖いのでまた潜ってしまう。言い方は悪いが鵜飼の鵜のようだったですね。それを見た時にはもうやめさせたいと思いました。

これから高齢になって「腰が痛い、首が痛い、足が痛い」といいながらも、海女をしているといい運動になっていると思うんです。危険なお仕事ですが、本当に無理をせず健康で、お体を大事にし、100歳まで潜ってください。潜っていると健康でしょ。どこも悪いところはないでしょ。元気でしょ。元気なんです。どこも悪いとこないんです。



山 川 豊さん

3月11日の大きな震災でいまだに避難生活を余儀なくされている方も大勢いるし、亡くなられた方や行方不明の方も大勢います。この前も演歌のキャラバン隊というのがありまして、被災地に行きましたが、唄のチカラっていうのはすごいなって思うんですよね。唄をきいていただいた方が「絶対がんばるから」と声をかけていただいて、「歌い手になってよかった」と思い、「もっともつとがんばらないと、もっともつといい歌を歌わないといけない」と思いましたね。

私はおしゃべりは上手ではありません。でも唄で日頃のお疲れを癒していただきたい。そしてまたがんばろうという気持ちになっていただきたい。

韓国の唄のお友達も結構いましてね。お隣の国ですからね、唄と唄のつながりとか、こういう海女さん同士の交流を深めていただいて、実行委員長、また続けてください。頼みますよ。これで終わっちゃだめですから。

全国からお集まりの海女の皆さん方、健康で無理をしないで長く続けてください。

6. 各地海女からの報告

(石) 全国海女代表の方からの報告に、輪島の海女さんもステージに上がってもらう予定でしたが、輪島までは7時間か8時間くらいかかるため、少し早くお帰りになりました。残念ですが皆さんによろしくということです。

それでは各地からの報告を東のほうから始めさせていただきます。まずは千葉県です。千葉県には現在150人くらいの海女さんがいますが、南房総市、その隣の千倉町、御宿町、それから最近わかったことですが、もうひとつ隣のいすみ市にも海女さんがいることがわかりました。その中から代表でちょっと面白い経歴の鈴木直美さんにお話を伺います。

千葉県南房総市 海女 鈴木直美さん

(太) 鈴木さんは東京生まれで、なぜ海女になろうと思ったのですか。

(鈴木さん:以降(鈴)) 海が好きだということが一番ですが、もともとサーフィンをやっていて、海とはなれ親しんでいるんですね。幼い頃からのイルカと泳ぎたいという夢が叶いまして、イルカと泳ぐことによって水中の喜びを知らされたんです。だから私にとって海女は、イルカが導いてくれたと思っている



千葉県南房総市 鈴木 直美さん

んです。とにかく海の中が面白いのでこんな素晴らしい職業はないと思っています。

(太) 今千葉県の漁獲量などはどうですか。

(鈴) 昔に比べれば少なくなっていますが、南房総の方は稚貝の放流など海を守っているんです。それと私たちはウェットスーツを着ないで漁をしているので獲りすぎということがないんだと思います。

(太) 寒さとか大変ですよ。

(鈴) かなり寒いです。5月、6月は15度から18度くらいまでしか水温が上がらないので、かなり寒いんですけどがんばってます。

(太) この地域の一番の自慢は。

(鈴) やはりこんなに文明が発達しているにもかかわらず、昔ながらの漁法でウェットスーツを着用しないということが誇りです。

(太) 何歳まで海女さんで。

(鈴) ギネスに挑戦で、出来る限りやりたいと思います。

静岡県下田市 海女 飯田千枝子さん

(石) 下田市の田牛と書いて「とうじ」と読みますが、そこに相差町や国崎、石鏡からも出稼ぎで若い海女さんが行っていました。飯田千枝子さんです。



静岡県下田市 飯田 千枝子さん

(太) 今と昔で取れるものは変わりましたか？

(飯田さん:以降(飯))

昔も今もサザエ、アワビで、今の時期は伊勢えびの刺し網漁です。私はやらないですけど。

(太) 静岡県は観光地の印象もありますが、地域的に課題はありますか。

(飯) 一時期民宿ブームの時は自分で採ったものを食卓に出していました。このところお客さんも少なく、サザエはたくさん取れますが、アワビは磯やけのせいか少なくなりましたね。

(太) 対策はしていますか。

(飯) 餌になるカジメを水産試験場の方が植えたりしてくださっていますが、まだ思うようにはいかないですね。

(太) 後継者はいますか。

(飯) 後継者はいません。私より若い人が2人、あとは、女性はいないです。土日にお勤めの男の人が海に入るくらいで少なくなりました。

(太) 最後に目標を。

(飯) 健康で楽しく海女をやりたいと思っています。

福井県坂井市 海女 大井七世美さん

(石) 坂井市というとなじみがないかもしれませんが、三国と呼ばれ、もっと簡単にいえば東尋坊の近辺で漁をされている大井七世美さんです。

(太) こんがり日焼けしていますが。

(大井さん:以降(大)) 私も副業でサーフショップを経営しています。

(太) 三国の漁の特徴は。

(大) 先祖代々海女さんたちが海を守り育てて、それを漁獲するという「里海」という言葉が世界に出てくる前から連綿とやってきた土地で、稚貝の放流、ヒトデの間引き、アマモの間引き、石転がし、豊かな森作り運動などをやっており、今日も先輩方は東尋坊の植樹した森の下草刈りなど森のお世話をしています。「海女の乗らない瀬は死ぬ」って先輩がおっしゃるんですけど、そういう形で海女さんが瀬を育てているというのがうちの特徴ですかね。



福井県坂井市 大井 七世美さん

(太) じゃあ資源は大丈夫？

(大) いや、海女の減少とともに資源も減っているんですけど、採取する人口が減っているので、そんな感じです。

(太) じゃあ不幸中でも幸いのほうですかね。

(大) 昔から「育てて獲る」という意識があるのでそれを守っていかないかんというのとそれを継いでくださる若い人たちに、それを繋いでいくというのが課題です。

(太) 大井さんの目標を教えてください。

(大) 私は5年前に病気をして手術をし、それをきっかけに海女に入れていただいたんですけど、これから海に潜ってがん細胞をやっつける免疫細胞を一杯出して、先輩の海女さんのように明るく海で大声で笑いながら人生を送りたいと思います。

和歌山県串本町 海女 濱口和子さん

(石) 和歌山県の濱口さんですが、和歌山県には女性の海女がいないと聞いていたんですが、私が去年調査した中では3人ほど串本近辺にいました。その中のお1人が濱口さんです。周りは全部男性で、その中で頑張っている海女さんです。



和歌山県串本町 濱口 和子さん

(太) またその中でどうして海女さんになろうと思ったんですか。

濱口さん:以降(濱)) 小さい時からアワビを採っているのを見ていたので、私も潜って獲ってみたいと思ってやってみました。

(太) 実際やってみてどうでしたか。

(濱) たくさん取れた時はすごくうれしくてそれでやってみようかと思い18歳の時から潜っています。

(太) おもに何が取れるんですか。

(濱) アワビとトコブシとサザエです。

(太) 漁獲量はどうですか。

(濱) 私が潜りだした時はサザエがすごく多くて、父と2人で一日に150キロくらい取れていたんですよ。今はすごく減ってきて一日にサザエだと20キロくらい獲るのが精一杯ですね。

(太) 何か取り組みは。

(濱) 稚貝の放流を多くしてますね。

(太) 串本というと台風が多くくる時に心配ですが、影響は。

(濱) 台風が来るともう入れないですね。

(太) 漁の日も少なくなってくるんですか。

(濱) はい。

(太) 目標を最後に伺います。

(濱) 健康で長く続けていきたいです。

鳥取県鳥取市 海女 長田初子さん

(石) 次は鳥取市の青谷というところに夏泊という非常に歴史のある海女のまちがありました。そこから遙々来て頂いた本日最高齢の海女さんである長田初子さんです。

(太) 今日は初子さんからみなさんにメッセージがあるということでマイクをお渡しします。



鳥取県鳥取市 長田 初子さん

(長田さん) それではちょっとご挨拶させていただきます。

どうして九州の漁師と伊勢の海女が夫婦になったか。

豊臣秀吉時代朝鮮出兵の時に鹿野城主亀井武蔵野守茲矩（これのり）、水先案内の船頭をしたのが夏泊の船頭の助右衛門であった。その際に亀井侯が功績をたたえられ、喜ばれ、助右衛門を鹿野に呼び、そこで「夏泊カマクチより八町をお前に与えるから好きな場所で漁業をせよ」と言われ、小さな湾ではあ

るが、足を入ただけで山のようにサザエアワビなどがあるのを見て伊勢の海女さんを娶っていただいた。夏泊の先祖は400年のその昔、九州の漁師と伊勢の海女さんと夫婦になり、我が夏泊の海女を切り開いたといわれています。私の父で12代目に渡ります。

ご先祖さんが来られた時は、ナダといった港の内には、足を入ただけでさざえアワビなどが盛り上がるようにザクザクいたそうです。

私も子どもの頃より海が大好きで、港の内に大きな岩がゴロゴロ敷き並べたようになっており、間に手を入れると手探りでたくさん取れていました。

私も17歳の頃より、おばさんたちに付いて潜りに行くようになりました。

その頃は20代、30代の方もたくさんおられました。現在では60代、70代の海女さんだけになり、寂しさを感じます。でも50年も昔のことですので、海に着ていく衣類も、薄い木綿、シャツ、お腰、パンツ、メガネも小さいメガネです。薄着なのですぐ寒くなります。岩場にあがり、岩陰で貝の支度をして、また、島着が乾いた頃に入ります。午前1回、午後1回入り、島桶を背負って岩場を登り、山道を帰ってきます。現在では着るものも変り、ゴムのスーツに足ヒレ、靴下手袋などして、体も温かくなりたくさんの量が取れるようになりました。

夏になると海女さんが仲間で海女簗りといった行事をします。イガイをたくさん入れたイガイ飯をたくさん炊き、イガイ飯とお酒を持ってお宮にお参りします。海女さんたちの海上安全と「みんなが元気でがんばりましょう」と言ってご馳走をたくさんいただきます。

夏になると海女さんの目が輝いてきます。「今日も風だで～」と言ってそれぞれ港に下りて身支度をし、船に乗せてもらいます。出発し、みんなが思い思いの場所に下ろしてもらいます。「ここらで入るよ～」と言って島桶を下ろして、ドボンと勢いよく入ります。青く澄んだ海の底がきらきらと輝いて見える。「ほーッ」と大きな息をして潜る。ひとつ、ふたつと島桶の中にイガイ、牡蠣、サザエなどが溜まっていきます。一生懸命潜っていると日頃のえらいことも苦労も忘れて、獲っても獲っても絶えることのないこの宝の海をご先祖様は私たちに下さったのだなあ心の中でお礼を言いながら今日も明日も元気で海を愛し続けたいと思います。

山口県長門市 海女 島寿和江さん

(石) 続きまして、山口県長門市の油谷に大浦というところがございます。ここも非常に歴史が古い海女のまちで、「海女」の下に武士の「士」をつけて「海女士」と呼んでいます。

(太) あちらでは何が主に取れますか。

(島寿さん:以降(島)) アワビサザエですね。

(太) 昔から変わってきましたか？

(島) やはり最近は少なくなりました。

(太) 海女士という侍の字が付いているということで、そこで海女をされているというのはどうですか。

(島) やっぱり誇りですね。毛利の殿様へアワビサザエを献上して、武士の「士」の字をもらったそうです。そして見渡す限りのものすごい広い海を貰っているんです。

どこに行っても「海女」ですが、うちのところだけ武士の「士」がつくんですよ。ありがたいことだと思います。

(太) これからの目標を聞かせてください。

(島) やはり先ほどのお方（長田さん）のようにがんばってやっていきたいと思います。



山口県長門市 島寿 和江さん

徳島県海部郡美波町 海女 大黒美貴子さん

(石) 徳島県の美波町の阿部（あべ）という素晴らしい漁港があります。ここは海女さんが自然保護を強くやってきたところであります。そこから遥々、朝漁をされてその後で来られたそうです。



徳島県海部郡美波町 大黒 美貴子さん

(太) 主に何をしていますか。

(大黒さん:以降(大黒)) アワビ、サザエ、とこぶし、うにです。

(太) 昔と変わりましたか。

(大黒) そうですね。サザエがすごく減少していて、アワビはそんなにも変わらないです。

(太) 地域の課題はどうですか。

(大黒) やはり後継者問題はあります。減っています。

(太) 町としてはなにか動きはあるんですか。

(大黒) 広くアワビを知っていただきたいということでアワビ教室を開いたりしています。海女で生活で

きるような環境を作れたらいいと思うんですが。

(太) 最後にメッセージをお願いします。

(大黒) 一日でも長く漁にかかわっていたいと思います。

福岡県宗像市 海女 松尾美智代さん

(石) 続きまして福岡県宗像市の鐘崎からおいでいただきました。海女の発祥地とも言われている鐘崎の松尾さんです。

(太) 海女の発祥の地ということですが、そこでどうして海女になろうと思ったんですか。

(松尾さん:以降(松)) 母が海女をしていて、私が後を継いだということです。



福岡県宗像市 松尾 美智代さん

(太) 発祥地といわれているところで海女をやっていることについてはどう思いますか。

(松) やはりいいところだなと思っていますが、魚場が狭く、昔お母さんたちが入っていた頃は請けて入っていたんです。昔はほうきで掃くくらいにいたけど今は減少して、私は母が15年位前に他界しましたので、それまではいっしょに入っていましたね。

(太) お母さんがいらっしゃると心強いですか。

(松) お母さんはすごいですね。

(太) 最後に目標を聞かせてください。

(松) 出来る限りがんばりたいと思います。

長崎県壱岐市 海女 片穂野八代子さん

(石) 長崎県の壱岐市の芦辺町の八幡という漁村集落があります。この海女さんは伊勢の海女から、ということは志摩の海女だと思いますが、伊勢の海女から海女漁を習ったという伝承があるという地です。片穂野さんです。

(太) 海女さん家系ですか。

(片穂野さん:以降(片)) そうではないですが、18歳から潜っています。

(太) 主に取れるものというのは。

(片) 5、6月は紫うにを取るんですけど、千葉の人と同じでウェットスーツ着用が禁止されているので、その時は水温が低くて一時間くらいが限界だと思います。その後7月になるとアワビサザエを採るんですけど、だんだん暖かくなるので、3時間、4時間、5時間というように泳いで帰ってきます。

(太) 地域が抱えている問題はあるですか。

(片) 15年位前は150人ほど海女がいたんですけど、今は専業海女は60名ほどで後継者不足ということですね、子どもたちは学校へ行ったり専門学校へ行っていて後継者は出来ないと思います。

(太) 最後に目標を。

(片) ひとつだけお礼を申し上げたいんです。この海女サミットに2009年から3回参加させていただいたんですけども、その間に私たちに出来なかったことをこの海女サミットで勉強して、今それをたくさん試みることができています。今日はここで報告は出来ませんが、後で館長さんに結果報告をさせていただきます。ありがとうございました。



長崎県壱岐市 片穂野 八代子さん

佐賀県東松浦郡玄海町 海女 岩下愛子さん

(石) 続きまして、佐賀県の玄海町の仮屋からお越しいただいた岩下愛子さんです。

(太) 海の資源はどうですか。

(岩下さん:以降(岩)) 今磯焼けで海藻が少ないので、振興センターの方と一緒にホンドワラの種子を1センチくらいに切って、袋にいれてそして石を入れて、試験的に沈めております。この前潜って見たら少し結果が出ているのではと思いました。

(太) 海女さんの数はどうですか。

(岩) 少ないですよ。10名足らずなんですけど、ガンガゼ退治とかを1年間に15日と決めて退治しているんですけど、必ずみんなきちんと作業をします。

(太) ご出身は山の方で、でも海女さんになったのはなぜですか。



佐賀県玄海町 岩下 愛子さん
生活しております。

(岩) 嫁いだところが漁師で三代目の網元だったんですよ。イリコやチリメンがたくさん取れていて、それはそれは忙しくて。しかし段々イリコとかも少なくなってきた、海女さんをはじめてみたら、私にとっては海女さんの方が面白かったんです。アワビを採った時の喜びというのは獲った人しかわからないけど、時化ている日に何度も何度も潜って6回目であきらめかけた時に獲って、うれしくて俳句を作ったりしました。着替える時は、棚田に真っ赤な夕日が沈んでいくんですが、そういう素敵なおところで漁ができて、生活が出来ているんだということに満足しています。

(太) これからの目標を最後に聞かせてください。

(岩) みなさんに心配をかけている玄海原発の地元なんですけど、一番私たちも心配なんですよ。そういう勉強会に行ったり、色々そういう面では心配しながら、でも無事に生活できるように祈りながら毎日

三重県志摩市 海女 磯和文子さん

(石) それでは地元の方にもお話を聞いてみたいと思います。志摩市の磯和文子さんです。

(太) 鳥羽志摩はダントツ海女の数が1位なんですけど、後継者問題はどうか。

(磯和さん:以降(磯)) やはり少なくなっています。若い方は中々入らずどんどん高齢化が進んでしまっていて、もっと来てほしいけどなり手があまりいないのが現状です。

(太) 対策は。

(磯) どうでしょうかね。なるべく練習したいという人はおばさんたちが教えてくれるんですよ。最初は取れないんで、ポイントまでおばさんたちが船で連れってくれるとか、私もそうやって習ってきたし、そういうふうにして段々はまってしまうというか、すごく楽しいんです。だから1人でも多く来ていただいてこの文化を継承して欲しいと思います。

(太) じゃあ私でも、一日だけでもやらせてほしいといったら大丈夫ですか。

(磯) 大丈夫ですよ。(会場のベテラン海女に問いかけ)

(太) いつかお邪魔したいと思います。最後に目標を聞かせてください。

(磯) 60代、70代の人たちは私よりもっと元気なんです。後10年やったらこの人たちのようになれるかなと思いながらいつも漁が終わるとヨレヨレになっていて、おばさんたちはまたそれから(海女漁の後)芋ほりとかパワフルにやっていらっしゃるので、その体力とか気力を身につけられたらと思います。



三重県志摩市 磯和 文子さん

三重県鳥羽市 海女 松井澄子さん

(石) 最後になりましたが、ご当地で昨日交流会を持っていたいたんですけれども、そういうところを全部お世話をいただいた当地の鳥羽市相差の海女さんに感謝を申し上げます。その代表の松井澄子さんに聞いてみたいと思います。



三重県鳥羽市 松井 澄子さん

(太) 昔と現状はどうですか。

(松井さん:以降(松)) やっぱりどこでも一緒のようにアワビが少なくなっているんですよ。アワビの食べる海藻は残っていますので、そんなのは関係ないと思うんですけど、やっぱりアワビが少ない。

(太) 昔はものすごく多かったんですか。

(松) そう。私は海女さんをして43年になるけど、海に育ったんやで、小さい頃から親がしとるのを見よう見まねで、小さい桶をもらって潜りにいったんや。ちょっと岩の割れ目のようなところへ行くと、ベタベタといっぱい引っ付いとた。島の上にも

ね。でもやっぱり段々段々と、磯焼けもあるんやろけど、ウェットスーツを着ると暖かく目がよく見えるでしょ。やっぱり獲りすぎたということもあるやろね。海の汚れも相まって、減つとるのに目がよく見えるでどうしても獲るでしょ。見えるもんを「減ってく」いうて残すことをせえへんでね。「あ、金が落ちとるわ」と思て拾ってくるでしょ。だから獲り過ぎたということもある。海女さんの数も減ってくけど、獲るもんも減ってくのでちょうどええくらいです。

(太) 最後に目標を聞かせてください。

(松) 43年もやってきたけど後10年くらい元気な限りは続けて行きたいと思います。

三世代海女

三重県鳥羽市相差町 中川寿美子さん 中川早苗さん 中川静香さん

(石) 最後になりましたが、2年ほど前に本当に若い海女さんがこの相差に誕生しました。三世代の海女さんです。

(太) 海女さんのイメージが変わりました。かわいらしいお姉さんですが、海女さんですか。

(静香さん:以降(静)) 一応修行中なんですけど。はい。

(太) 現役女子大生でいらっしゃるんですね。なぜ海女さんになろうと思ったんですか。

(静) おばあちゃんもお母さんも海女さんで、せっかくこの相差に生まれたから地元に残るならちょっと潜ってみよかなと思いました。

(太) でもちょっとやそつとでは決心付かない気がします、なぜ潜れちゃったのかな。

(静) はじめて行った時って、ちっちゃいサザエ一個しか取れなかったんですけど、それを獲って家に帰ってきた時におばあちゃんは「こんなに獲ったんか」と言ってくれて、それがあから私はがんばれるし、続けようと思いました。

(太) お母さん、おばあちゃんはどうなところがすごいですか。

(静) いっしょのところを潜っていても10倍くらい獲ってくところがすごいです。

(太) 将来はどうなんですか。

(静) 私は弟がいるのでお嫁にいかないといけないんです。

(太) そんなことないよ。

(静) 家が旅館で、弟が継ぐので、「はよ嫁に行け」といわれているので、大学4年間はがんばります。

(太) でもこんな綺麗な海女さんがいるのならもっとお客さんや、私も海女になりたいという人が増えるかもわからないのでもう少しがんばりましょうか。



三重県鳥羽市 中川 静香さん



三重県鳥羽市 中川 早苗さん

どうですか。

(早) 家に帰ってきてご飯食べている時に3人で海女さんの話が
できるのいいと思います。

(太) ありがとうございます。それでは寿美子さんにお伺いします。
3人で漁が出来るとは思っていましたか。

(寿美子さん:以降(寿)) 夢にも思っていないでした。まあこの子
(早苗さん)が「海女行く」言うた時も「まあ海で遊んできやええ
わ」と思とたくらいやし、また次の(静香さん)も「きれいな海を
見とればええわ」と思とたくらいやし。

(太) 今後お2人に期待することはありますか。

(寿) 期待ゆうてもねえ。あっちの(静香さん)は期待できやんよ
うにしとるし。

(太) 3人でやっていることは珍しいことだと思うんで。

(寿) 楽しいね。話がひとつになれるし。海の話が家に来ててもひとつ
になれるやん。「今日は波がおっきかたね」とか「あそこらへんは深かったやろ」とか。

(太) 情報交換もできるということですね。三人で行って量は違いますか。

(寿) でも私が段々よう獲らんなってくよってに、この子ら段々えろなってくるよってに。



三重県鳥羽市 中川家三代海女さん

(静) はい、がんばります。

(太) 次はお母さんの早苗さんですが、静香さんが海女さんになると
言った時はどう思いました。

(早苗さん:以降(早)) 大丈夫かなと思ったけど、でも私でもできた
んやから、静香はちっちゃい時からおばあちゃんを見ているので私
よりはいけるんじゃないかなと思いました。

(太) 早苗さんは違うところから嫁がれたんですか。

(早) 私は南伊勢町から来て、海女は潜ったことも見たこともなかつ
たんです。

(太) それこそ大変だったんじゃないですか。

(早) でも自分から行く行くと行って、おばさんがいっしょに連れて行
ってくれて「ここで泳いどれ」いうて放ってかれました。でもそれ
で自分で行って自分で覚えました。

(太) 今三代で海女というのはとっても珍しいことだと思いますが、



三重県鳥羽市 中川 寿美子さん

(太) そんなこといわずに目標を教えてください。

(寿) 目標は、みんながまめでいったらいいと
思います。

(早) 3人で一日でも長く潜れたらいいと思
います。

(静) おっきなアワビをいっぱい獲りたいです。

(太) がんばって獲ってください。ありがとう
ございました。

7. 済州島海女唄

韓国の済州島は、日本以外に唯一女性が素潜りで漁をする海女文化が伝承されており、古くから日本の海女との親交があります。近年、済州島と鳥羽志摩の海女との国境を越えた交流がさかんになっており、共に海女文化の継承啓発について取り組んでいます。

今大会では、古くから歌い継がれてきた海女唄を披露いただくために来日していただきました。

解説:チャヘギョンさん 通訳:キムスンイムさん



済州島海女のみなさん

本日済州島から三人の海女と一緒に参りました。ご招待頂きありがとうございます。

今済州島には100の漁村経営という組織がございます。村ごとに海女の集まりの組織がありますが、約5,000人位の現役海女が働いております。本日この会に参加してみて、日本にはまだまだ若い海女さんがいるようですが、済州島では75%が60代から70代の海女さんです。

先ほど申し上げた100の漁村経営の組織では50代以上の海女さんが1,000人働いています。そして40代以下の海女さんは150人しかいないので、10年後には海女さんがほとんどいなくなるのではないかと心配されております。こういうことから済州島ではこれからも持続的に海女漁ができるように文化を保存する活動を続けております。済州の海女さんは済州の女性を象徴している代表的な存在だといえます。これから歌わせていただく海女唄は済州島無形文化財第1号に指定されています。済州の海女達が海に出る時に櫓をこぎながら海女に出たわけですが、櫓をこぎながら歌っていた唄です。櫓をこぐ時はとても疲れるつらい作業ですが、その時に唄を歌いながら気合を入れていたわけでした。この唄は労働を唄で乗り越えていた意思の表れだと思います。

3人の海女さんは、済州島に南の都市であるソギボ市にテッピーンギという小さな村がありますが、その村では夏場には毎週土日、観光客を相手に海女唄を披露しています。そのメンバーの3人です。海女頭のおヨンスさんです。講演チーム長のカンウォルチュルさんです。事務係のキムヨンヒさんです。今着ている服は済州島の民族資料第10号に指定されています。この服は「ソウチュンギ」という名前で、白い浮きのようなものは「テワク」といい、また日本海女のスカリのようなものは済州島では「マンサリ」と呼ばれています。済州の海女さんは昔から、韓国本土や千葉県から三重県まで出稼ぎに行っていました。



済州島海女唄披露

8. 大会宣言

海女サミット 2011 最後のプログラムとして、全国の海女さんを代表して鳥羽市相差町の海女 中村美智子さんに大会宣言をしていただきました。



三重県鳥羽市 中村美智子さん

（鳥羽市海女 中村美智子さん）

本日、2011年10月30日、鳥羽市相差町で開催した第3回「海女サミット2011 日本列島海女さん大集合」に全国各地の海女が集まりました。

また、韓国済州島からも参加してくれました。海辺に住み、海が大好きで、海が穏やかであるかぎり、素潜りでアワビやサザエや海藻をとって、自然と付き合っている私たちは、みんな親しい仲間であることを改めて確認しました。

私たち海女は、これからも親しい交流を重ね、その輪を広げ、海女文化の伝統を守りながらも、女性らしい工夫を取り入れて、地域と漁業の持続的な再生、発展に積極的に力を尽くします。また、子どもたちに海の大切さを伝え、海の環境を守るために頑張ります。

今日から私たちは、私たちの海女文化を、誇りをもって世界に発信するため、同じ文化伝統を有する韓国済州道の海女さんと連帯を深めながら、ユネスコ世界無形文化遺産登録を目標において、次の一步を踏み出したいと思います。

参加海女・参加者一同 2011年10月30日

9. 閉会挨拶

相差町内会長(抜粋)

当地相差町は、鳥羽志摩の海女約1,000人のうち100人の海女が操業しており、高齢化等によって海女さんの数が減少しているものの、まだまだ元気で活気のある海女さんがたくさん活躍しており、私たち男性陣も敵わないような、意気揚々とした海女さんもたくさんおります。

そのような中、町内会や漁協等の関係団体で「相差海女文化運営協議会」を設立し、「海女文化」を町の資源と位置付け、「海女のまち相差」として広くアピールし、ひいては、鳥羽志摩の海女文化の底上げのための原動力になればと日々活動を続けているところでございます。

このたび、当地相差町でこのように全国の海女の皆さんが集まった「海女サミット」が開催されたことは誠に光栄であり、相差町民としても大変有意義な時間を過ごすことができました。



中村相差町内会長

最後になりましたが、全国の海女の皆様を始め、ここに本日お集まりいただきました皆様がともに連携しながら、益々海女文化が大きく啓発され、継承されていくことを祈念し、閉会のご挨拶とさせていただきます。これをもちまして海女サミット2011「日本全国海女さん大集合」を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。



山川豊さんと全国海女のみなさん

志摩市エクスカーショ

平成23年10月30日（日）に相模町で行われた2011「日本全国海女さん大集合」閉会後に、全国海女20名・済州島5名・志摩市通訳兼アテンド1名・実行委員長・副実行委員長の計28名の宿泊と急遽当日3名の方が合歓の郷へ宿泊されました。

船上での歓迎交流会

また、歓迎交流会においては、市長も交え総勢33名の方々に2時間程の夜間クルーズではありましたが、非常に和気あいあいの中で楽しいひと時を過ごして戴くことができ、志摩市在住の済州島出身者「海女」さんにも通訳兼アテンドとしてご参加いただきました。志摩市としては今回のエクスカーショを「楽しく、明るい、思い出」を残して戴きたいという思いを前面に打ち出しエクスカーショ内容を企画いたしましたので、船上交流会においては、全国の海女さんと済州島の海女さんを取り持つように、志摩市在住の済州島出身の海女さんが積極的にアプローチしていただき、交流会終了後も明け方までおしゃべりをしていただくと聞いております。



和具大島での魚場視察

翌日は、済州島の海女さんたちは帰りの便の時間が決まっていたので、志摩市通訳を含め6名だけは、志摩市内で「海女漁」に必要なものや雑貨品などの買い物をし、別れを惜しみながら賢島駅から帰路につきました。

その他の海女さんたちは、興味豊かに和具大島の漁場を見学し、地元漁師さんの説明に熱心に耳を傾けておりました。船に乗られている海女さんたちの立ち振る舞いは、前日の交流会とは大違いで非常に厳しい目で「漁場」を見つめており「海女漁」をしている時本来の姿を垣間見た思いがいたしました。

移動中のバスの中でも、日本海の魚場や九州地方・関東地方の魚場など、自分たちの漁場と比較したり、志摩市の魚場との違いや各々の魚場の違いなどを「海女さん同士」で熱心に話しかけられている姿が、アテンドを行なっている私も市職員には強く印象に残っております。



和具大島での魚場視察



地元の漁師さんの説明に熱心に耳を傾けていました。

志摩自然学校

その後は、志摩自然学校に向かい、2班に分かれていただき、「ウォーターボール体験」と「真珠の取り出し体験」を行っていただきました。「ウォーターボール体験」では、普段は海に潜っている海女さん達が、ウォーターボールの中に入り、海の上を歩いたり、楽しい時間を過ごし、さらに、実際の真珠貝からの「取り出し体験」では、その真珠でネックレスなどを作成していただくなど、普段行ったことがない楽しい時間を過ごすことができた大変喜ばれ、童心にかえたような笑顔を見ることができました。



志摩自然学校でのウォーターボール体験



海の上を歩いたりしていつもと違う海を楽しみました。



真珠の取り出し体験



その真珠でネックレスなどを作成しました。

最後には、志摩市長も交え、少しゆったりとした時間を持ちながら昼食を取り、会話を弾ませ、非常に名残惜しく賢島駅から午後2時30分から3時30分頃の電車にてお見送りをさせて頂き、またお会いする日を約束してエクスカージョンを無事終了させていただきました。

海女さん大集合の「各地海女からの報告」の中でお話のありました、長崎県壱岐市の海女 片穂野八代子さんからのお手紙を紹介します。

三重県で開催されました日本列島海女さん大集合に、2009年～2011年の3回に於いて参加をさせていただきました長崎県は壱岐の島 東部漁協 海女組合代表の片穂野です。

韓国済州島、日本各地の海女、そして地元の海女同士の交流を通じて、各地の海女達のそれぞれの特徴や考えを知る事が出来ました。

当組合は、約60人の海女が資源を守りながらアワビ、サザエ、ウニ等を獲っています。アワビなどが生息するために必要な海藻が減少したり、深刻な磯焼けに悩んでいました。何か打つ手はないのだろうかと考えている中、この海女サミットに於いて貴重な話を耳にしました。

2009年のサミットの後に、早速と、海女総会を開き、研修報告並びに生態系による駆除、他作業を提言したところ、漁場再生のために皆が一致団結をし、漁協の協力のもとに、2010年6月に初めての実施でガンガゼ駆除、うみうし駆除、磯あらい（岩場をこする作業）などを行いました。

実施した結果報告を述べてみたいと思います。

まず最初に、昨年6月と今年6月、ガンガゼ駆除を行った結果、昨年は大量に捕獲できましたが、今年は減少しており、そのせいかどうかは分かりませんが、海藻類の増加も見られたように思います。

昨年3月に磯あらい作業（岩場の石をこする作業）、今年3月にも同じように実施した結果、多少ではありますが、モズク、ヒジキ等が見られるようになりました。

ウニ、アワビ、サザエ等におきましては、東部漁協の方では、コンブの養殖により、食用できる部分は販売、残りのコンブを禁漁区その他の沿岸に投げ入れています。

ウニに関しては特にコンブを食べ、実の入りも良い方向に向かっている状況です。

又、赤ウニ、アワビに関してはコンブによる中間育成もしています。

これらの生態系事業は、皆さんとの交流があったからだと感謝いたしております。これからも継続して行きたいと思います。

最後に、海女サミット、又本大会にご尽力されました関係者の皆様方に厚く御礼申し上げますと共に、世界遺産登録を心より願っております。

ありがとうございました。

長崎県壱岐東部 海女組合会長 片穂野 八代子

これまでの日本列島海女さん大集合

2009年

10月3日

第1回「日本列島海女さん大集合 海女フォーラム」鳥羽大会開催

場 所 三重県鳥羽市 海の博物館

参加海女 韓国済州道、岩手県久慈市、千葉県白浜町、徳島県美波町、石川県輪島市、福井県三国町、福岡県鐘崎、長崎県杵岐市、熊本県天草市、三重県志摩市、三重県鳥羽市

記念講演 「日本の海女が果たしてきた役割」元日本民具学会会長田邊悟

「日本と韓国の海女の交流」宮崎公立大学教授李善愛

研究報告 共通テーマ 【志摩の海女文化を探る】

「近代志摩海女の出稼ぎについて」三重大学人文学部教授塚本明

「志摩海女と房総海女の民俗比較」三重大学人文学部教授武笠俊一

「全国漁村聞き取り調査から見る志摩海女」三重大学客員教授川口祐二

全国海女の報告 全国海女から資源管理や後継者問題について報告



第1回鳥羽大会



志摩市での海女小屋体験

2010年

9月 4日

三重大学・鳥羽市・海の博物館文化フォーラム2010

場 所 三重県鳥羽市 海の博物館

研究報告 共通テーマ 【産業としての海女】

「海女さんの海の森」生物資源学研究科教授前川行幸

「海女さんの資源管理」生物資源学研究科教授原田泰志

9月25日

「海女さんによる販売への取り組み」生物資源学研究科准教授常清秀

第2回「日本列島海女さん大集合 海女サミット2010」志摩大会開催

場 所 三重県志摩市 志摩文化会館

参加海女 韓国済州道、千葉県白浜町、静岡県下田市、福井県三国町、大分県臼杵市、福岡県宗像市、佐賀県玄海町、長崎県杵岐市、三重県志摩市、三重県鳥羽市

記念講演 「海の文化と里海」海とくらし研究所代表 関いずみ

海女報告 「教えて！海女さん」全国海女に子どもたちが質問

研究報告 「済州島の海女」済州道立海女博物館 チャ ヘギョン

「三重県におけるアワビ資源の動向」三重県水産研究所員 阿部文彦



第2回志摩大会



答志島での記念放流

参加海女

韓国济州島 石川県輪島市 千葉県南房総市 静岡県下田市 福井県坂井市 和歌山県串本町
徳島県美波町 鳥取県鳥取市 山口県長門市 福岡県宗像市 佐賀県玄海町 長崎県杵岐市
三重県志摩市 三重県鳥羽市

主 催

鳥羽市 海女サミット実行委員会

共 催

志摩市 海の博物館

後 援

三重県

三重県教育委員会

志摩市教育委員会 鳥羽市教育委員会

(社)伊勢志摩観光コンベンション機構

伊勢志摩国立公園協会 伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会

鳥羽磯部漁業協同組合 三重外湾漁業協同組合

鳥羽商工会議所 志摩市商工会

鳥羽市観光協会 志摩市観光協会

鳥羽市旅館組合連絡協議会

鳥羽市温泉振興会 志摩市温泉振興協議会

相差町内会

相差海女文化運営協議会

海女サミット実行委員会事務局

鳥羽市企画財政課

〒517-0011 鳥羽市鳥羽三丁目1番1号

T E L 0599-25-1101 F A X 0599-25-3111